琉球大学学術リポジトリ

教材研究（芥川龍之介）

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2009-04-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9668

教材研究（芥川龍之介）

小　澤　保　博*

The Study Teaching Materials on R.Akutagawa's Work

Yasuhiro OZAWA

Ⅰ「魔術」

1（「序」）

「魔術」（「赤い鳥」大正九年一月）は、鈴木三重吉主催の児童文学雑誌「赤い鳥」掲載の芥川龍之介童話五篇の一つである。「蜘蛛の糸」（「赤い鳥」大正七年七月）「犬と笛」（「赤い鳥」大正八年一月）「魔術」（「赤い鳥」大正九年一月）「杜子春」（「赤い鳥」大正九年七月）「アグニの神」（「赤い鳥」大正十年一、二月）が、その内訳である。今日この五篇の童話を鳥瞰すれば、児童文学の範疇を超えた虚構の世界に子供たちを誘う優れた作品であることがわかる。

「魔術」は、谷崎潤一郎「ハツサン・カンの妖術」（「中央公論」大正六年十一月）を典拠とした芥川龍之介の優れた創作童話である。谷崎潤一郎「秦淮の夜」（「新小説」大正八年二、三月）に依拠した作品「南京の基督」（「中央公論」大正九年七月）には「本篇を草するに当(あた)り、谷崎潤一郎氏作『秦淮(しんわい)の一夜』に負ふ所尠(すくな)からず。附記して感謝の意を表す。」という但し書きを附したが、この「魔術」には「ハツサン・カンの妖術」についての言及はない。しかし、先輩作家谷崎潤一郎に対する暗黙裡の了解があったと思われる。というのは、芥川龍之介の出世作「鼻」（「新思潮」大正五年二月）「芋粥」（「新小説」大正五年九月）は、「今昔物語」に衣装を借りて、さらに主題をシング「聖者の泉」（松村みね子譯）から借りてきているからである。というよりこの作品を十年前に翻案小説として紹介した坪内逍遥「霊験」からの主題の借用である。この創作行為そのものが、谷崎潤一郎の出世作「刺青」（「新思潮」明治四十三年十一月）「麒麟」（「新思潮」明治四十三年十二月）の創作行為の模倣である。芥川龍之介にとって「ハツサン・カンの妖術」に依拠した作品「魔術」を書く行為そのものが、先輩作家谷崎潤一郎に対する賞賛を寄せる行為の一種と考えられる。

2（「魔術」一）

「魔術」は、三年前の谷崎潤一郎の虚構の文学世界、つまり嘘八百の世界「ハツサン・カンの妖術」を典拠にして芥川龍之介が創造した虚構の世界、つまりは嘘八百の世界である。「白」（「女性改造」大正十二年八月）では、作中人物に友人佐藤春夫の名前を登場させて友人に対して隠れた賛美の気持を込めたのと同じく、先輩作家谷崎潤一郎に対する儀礼を超えた親しみの

* 琉球大学教育学部

表れである。「マテイラム・ミスラ君と云へば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の独立を計ってゐるカルカツタ生れの愛国者で、同時に又ハツサン・カンといふ名高い婆羅門の秘法を学んだ、年の若い魔術の大家なのです。」（「魔術」一）、マテイラム・ミスラの現住所は「府下荏原郡大森山王一二三番地」（「ハツサン・カンの妖術」）で、これに拠って芥川龍之介もマテイラム・ミスラの現住所を「大森界隈」（「魔術」一）としている。こうした「魔術」の作中の構想が「ハツサン・カンの妖術」に全面的に寄りかかっている事を確認すれば、「私は丁度一月ばかり以前から、或友人の紹介でミスラ君と交際してゐました」（「魔術」一）の友人が、「ハツサン・カンの妖術」の著者である谷崎潤一郎である事が分かる。

ある時雨降る日、私はマテイラム・ミスラ君の自宅を訪ねて相次いで三つの魔術（「催眠術」）を体験させられる。第一の魔術は、ミスラ君が私を招き入れた石油ランプに照らされた質素な部屋、西洋間に据え置かれたテーブルと書棚、窓際に置かれた机の部屋で行われる。ミスラ君は、テーブル掛の中の花を摘みあげて芳香を私に嗅がせたりする。「縁へ赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。（中略）が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持つて来ると、丁度麝香か何かのやうに重苦しい匂さへするのです。」（「魔術」一）

第二の催眠術は、テーブルの上のランプが独楽のように激しく回転して回転の極みで突然停止して最初の静状態に戻るのである。私は、呆然として回転するランプの独楽の美しい灯火に見とれたりする。「その拍子にどういふ訳か、ランプはまるで独楽のやうに、ぐるぐる廻り始めました。」（「魔術」一）

こうして第三の催眠術が、実行される。ミスラ君が壁際に据えた書棚に手を差し伸べて招く仕草をすると書物が次々と飛んでくる。取り分け私を驚かせたのは、一週間前に貸した本が、必要な頁を開いて私の膝の上に舞い降りてきたことであった。私が驚いた時には、全ての書物は再び書棚に戻っていた。「今度は書棚に並んでゐた書物が一冊づつ動き出して、自然にテエブルの上まで飛んで来ました。」（「魔術」一）

ミスラ君によれば、第一、第二、第三の催眠術は私にもその能力を譲与することが、可能であるという事である。しかし、それには条件があるのですという、以下いかにも芥川龍之介的な条件が附与される。二年前の作品「蜘蛛の糸」で主人公犍陀多に御釈迦様が与えた条件と同じである。高校生の「蜘蛛の糸」に寄せた感想文「こんなことを考えて書く人が、かわいそうだ。」（下沢勝井「蜘蛛の糸」）が、思い出される。

「唯、慾のある人間には使へません。ハツサン・カンの魔術を習はうと思つたら、まづ慾を捨てることです。あなたにはそれが出来ますか。」（「魔術」一）

このような作品構想上の設定は、明らかに芥川龍之介流であり、人間性に高貴な側面を要求した彼の大正期文学の特色を示したものである。最近の阿川弘之の随筆に拠れば、谷崎潤一郎が戦後日本に容共政権ではなくて、共産党政権発足の暁には自決するための青酸カリを準備していたという記事を掲載していた。「ハツサン・カンの妖術」もこの作品に依拠した「魔術」もそれを背後で支えた作家の、人間性に高貴な側面を求めた時代精神は、大東亜戦争敗戦後消滅したといえるかもしれない。

私は、自己の欲望を捨てる事を条件に魔術（「催眠術」）を施す特権を授与される事を自己認識する。そして魔術の世界に私を導く呪文が、ミスラ君によって唱えられる。しかし、傍で彼の唱える呪文を聞く私は、その状況を把握していない。

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寝床ノ仕度ヲシテ置イテオクレ。」（「魔術」一）

ミスラ君が唱えるこの言葉が、ある種の呪文であって私を魔術の世界に引き込む為の鍵である事に私は、気付かないのである。こうして私は、ミスラ君が敷いた資格試験の世界に誘われるが、それは極端に高度な精神性を要求される合格率の低い認定試験である。

3（「魔術」二）

「私がミスラ君に魔術を教はつてから、一月ばかりたつた後のことです。（中略）私は銀座の或倶楽部の一室で、五六人の友人と、暖炉の前へ陣取りながら、気軽な雑談に耽つてゐました。」（「魔術」二）

本人の私は、気付いていないがここからは全てが、魔術（「催眠術」）に依って私が誘われた幻覚の世界である。無論、その事に私は少しも気付いていない。私が、陥った幻覚の世界において荒唐無稽な筋立てにしない為にも作者の細部の工夫は見られる。「魔術」（「一」）で私は、大森界隈のミスラ君の家を時雨の中、雨音を聞きながら訪問するが、そのまま催眠状態に陥って一ヵ月後の銀座の倶楽部での優雅で刺激的な一時を過ごす。こうした幻覚の意識の中でも私は、窓の外の雨音を心地よく聞き続けるのである。つまり「魔術」（「一」）で「陰気な部屋」「質素な西洋間」で侘しく聞いた雨音を、一ヵ月後に今度は「銀座の或倶楽部の一室で」「暖炉の前へ陣取りながら」（「魔術」二）心楽しく聞く。つまり、私はミスラ君の催眠術により意識を喪失して別世界に誘われた訣ではなくて半睡状態で意識の断片が、雨音を聞いている状態である。

「魔術」（「二」）は、私が自己の能力を過信して少しずつ傲慢な態度に変身していく過程をなぞっている。最初、私は魔術を学ぶ為に時雨の中、雨に濡れながら未知の人を訪ねる謙虚さを持っていて、態度もそれに相応しく低姿勢であった。「どうもいろいろ恐れ入ります。」（「魔術」一）、しかし銀座の倶楽部での私は、周囲の人々の魔術の大家という評価に相応しく「魔術」（「一」）で見せた謙虚さを失っていた。「私は椅子の背に頭を靠せた儘、さも魔術の名人らしく、横柄にかう答へました。」（「魔術」二）、しかし魔術によって金貨を得た後の態度は、横柄ではありながらも意識の中で先師であるミスラ君との約束が消えずに残っている。

「いや、僕の魔術といふやつは、一旦慾心を起したら、二度と使ふことが出来ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまつた上は、すぐに又元の暖炉の中へ抛りこんでしまはうと思つてゐる。」（「魔術」二）

初心を忘れ謙虚さを忘れて、魔術の力を過信して傲慢になりながらも最初の約束に縛られていた私は、やがてミスラ君の仕組んだ最終的な審問に直面する設定である。つまり、仲間の中で一番狡猾な男の挑戦を受ける事になる。それは、私の深層の心理に眠っている人間の欲望を試す試験でもある。そしてこの関門は、合格率の低いむしろ限りなく不可能な人間性を無視した審問と言え、「蜘蛛の糸」で試されたお釈迦様の慈悲の限界を思わせるものがある。前掲、下沢勝井「蜘蛛の糸」には「こんなとき『さあみんなもなかよくいっしょに登ろう』などということばが出るでしょうか。」（中二）という感想文を載せていたが、「魔術」についても同じ事が言えるだろう。

全財産を賭けた骨牌の勝負において私は、私的な欲望に負けてついに自らの欲望の為に魔術の秘儀を使い、ミスラ君との約束を破り墓穴を掘るのである。しかし、このミスラ君の仕組んだ審問は、人間の本性を無視した試験と言わざるを得ない。翻って考えれば、魔術それ自体の行使を無効にするための作者が仕組んだ構想上の作為と考える事が出来る。自らの私的欲望の為に魔術を行使して密かに凱歌を上げた瞬間に魔術そのものが、無効になる事を実感するのである。

> すると不思議にもその骨牌の王様が（中略）にやりと気味の悪い微笑を浮べて、「御婆サン、御婆サン。御客様ハ御帰リニナルサウダカラ、寝床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」と、聞き覚えのある声で言ふのです。（「魔術」二）

こうして魔術（「催眠術」）により夢中の私は、突然理性の世界に引き戻されて我にかえるのである。こうした作品構造は、理性によりその良心を鋭敏にして自らを律して生きよという教訓的文芸である。そしてこれらの作品を読了すれば、遥かに過ぎ去った大正期から良心的な一人の作家の理想主義を現在に生きる私たちに運んで来る。こうした理想主義的な良心が、日々の痛苦に満ちた日常生活を送るのに個人の良心を

刺激して困難さを覚えさせるのである。大東亜戦争敗北後の日本では、この種の良心を麻痺させ日々の謎に満ちた人生を憎悪と確信を以て生きる人生の秘鑰を発明した。個人の良心を大義の為に麻痺させる特効薬、即ちイデオロギーである。芥川龍之介自身こうした状況を予見していた。つまり、自殺の理由について「何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。」(「或旧友へ送る手記」)、この対象は勃興するプロレタリア文学、中野重治の存在がその対象である。芥川龍之介にその詩精神を認められた中野重治は後年日本共産党から除名されている。

4 (「魔術」三)

こうして私は、ミスラ君の仕組んだ魔術(「催眠術」)によって人間性を試されて敗退するのである。魔術から覚醒した私は、再び謙虚な姿で以前と同じくミスラ君の居間で呆然として佇んでいる自分を発見する。この作品構想には、邯鄲(かんたん)の夢(「盧生(ろせい)の夢」)、芥川龍之介が深く馴染んだ中国の故事成語の世界、一炊(いっすい)の夢(ゆめ)が着想に示唆を与えている。

私が指の間に挟(はさ)んだ葉巻の灰さへ、やはり落ちずにたまつてゐる所を見ても、私が一月ばかりたつたと思つたのは、ほんの二三分の間に見た、夢だつたのに違ひありません。(「魔術」三)

ここで「魔術」の主題についての考察を加えて見ておくと、欲望を充足させるために魔術を使うのはよくないという前提がある。「ハツサン・カンの魔術を習はうと思つたら、まづ慾を捨てることです。」(「魔術」一)、この最初の禁止事項、神話世界の禁忌に似たタブーが再度作品末尾で確認される。「私の魔術を使はうと思つたら、まづ慾を捨てなければなりません。」(「魔術」三)、それでは慾の存在全てを否定してしまってよいのだろうか、慾こそが人間社会の自然法に等しい社会発展の原動力ではないのだろうか。慾を否定した平等社会とは、人間性を無視した毛沢東が、掲げた狂気の産主義社会である。芥川龍之介の足元を脅かしたプロレタリア文学とは、究極に万人の平等を謳った各人の個性を無視した独裁国家樹立を目指す政治集団であり、作者が欲望を否定したとは考えられない。「魔術」は魔術により特権を得たと自覚する傲慢こそが、罪であるという教訓的文藝作品であろう。げんに「私は恥しさうに頭を下げた儘、暫くは口もきけませんでした。」(「魔術」三)とある。

II「素戔嗚尊」

はしがき

「素戔嗚尊」(「大阪毎日新聞」大正九年三月～六月)を創作したことについて一つの仮説が、存在する。「松岡譲宛書簡」(「大正七年二月五日」)に拠れば、ヘッベル「ユーディット」を読んで感激してこの主題を「阿闍世王」の物語展開の中に吸収して作品化しようという試みである。この趣旨により構想された「地獄変」(「大阪毎日新聞」大正七年五月)は、大阪毎日新聞社友としての務めを十分に果たすものであった。続篇「邪宗門」(「東京日日新聞」大正七年十月～十二月)、「路上」(「大阪毎日新聞」大正八年六月～八月)は、中絶未完のままに終わった。「素戔嗚尊」は、汚名挽回、起死回生を狙った作品として終結までこぎ着けることは出来たが、作品完成度は未熟である。芥川龍之介は、この頃から中篇、長篇作品向きでない自己の素質に気付いたのではないか。「地獄変」創作中にこの「神代小説」(「薄田淳介宛書簡」大正九年三月二十七日)について腹案があったことが、以下の書簡から伺い知ることが出来る。「『日本武尊』を書かうかと思つてゐます」(「薄田淳介宛書簡」大正七年四月二十四日)、さらに「題は日本武尊か或は素戔嗚尊」(「薄田淳介宛書簡」大正七年七月三十一日)とある。この腹案から実作までは二年の道程があったことになる。「素戔嗚尊」(七)をかき続けている作者自身の述懐が、残されている。「素戔嗚尊の戀愛が書けないで殆閉口してゐます(中略)續いて彦火々出見尊と日本武尊をも書いて見る心算です」(「薄田淳介宛書簡」大正九年三月二十七日)、

これで見る限り「ユーディット」読破の余韻を「阿闍世王」の古代印度を舞台に作品化せんとする芥川龍之介の野心は、この時期まだ持続していたことが知れる。彦火々出見尊とは、言うまでも無く天照大神の孫、皇孫瓊瓊杵尊と木花開耶姫との間に出来た子で山幸彦の名前で知れており、海神の娘豊玉姫と結婚して鵜草葺不合尊を生んだ。彼が、母の豊玉姫の妹玉依毘売との間に設けた四人の子供の末っ子が、神倭伊波禮毘古命（初代神武天皇）である。

日本武尊は言うまでも無く、神代最大の英雄である。景行天皇の皇子で九州の熊襲、東国の蝦夷征伐で名を挙げた記紀伝説上の英雄である。妻は走水の海で入水した弟橘比売命である。その辞世の歌は「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」である。作者の当初の計画では、高天原を舞台に素戔嗚尊を高千穂の峰を舞台に山幸彦の物語を、そして大和を舞台にして日本武尊の物語を書き、「神代記」三部作を創作する予定であったことが分かる。しかし、現実には記紀伝承の世界を舞台に創作されたのは、「素戔嗚尊」一作だけで終わっており、この作品そのものが失敗作であるという認識があったからだと思われる。

素戔嗚尊は、言うまでも無く伊邪那岐命と伊邪那美命との子供で天照大神の弟である。素戔嗚命の高天原での乱暴が原因で天照大神は、天の岩屋にこもり素戔嗚尊は、高天原から出雲に降りて八岐大蛇を成敗して奇稲田姫を救出、八岐大蛇の尾から得た天叢雲剣を天照大神に献じる事になる。

1（「一」）

時代は、神代で場所は高天原である。「容貌の醜い一人の若者」（「素戔嗚尊」）が、大勢の若者達を相手に「天の安河の河原」で力競べをしている。圧倒的な技量を誇る彼の技を目前にして、周囲の者達はあからさまに冷淡を装い彼の抜群の才能を黙殺しようとする。しかし、彼は何も気付かない風を装い快活にさらに自分の能力の桁違いに高度であることを見せ付ける。弓の技量で他の若者を圧倒して、周囲の者の反感、冷笑、黙殺を受けた彼「容貌の醜い若者」（「素戔嗚尊」）は、他の若者達の関心が移ったのに沿って弓矢を捨てて、新しい遊戯「天の安河の河原」を飛び越える遊びに夢中になる。ここでも他を圧倒する彼の能力は、他の若者達の羨望、嫉妬そして憎しみの対象であり、賞賛は容貌の醜い彼の存在を無視するが如くに、はるかに能力の劣る「背の高い美貌の若者」に向けられるのである。

その若者は彼と同じ市松の倭衣を着てゐたが、頸に懸けた勾玉や腕に嵌めた釧などは、誰よりも精巧な物であつた。彼は腕を組んだ儘、ちよいと羨しさうな眼を挙げて、その若者を眺めたが、やがて彼等の群を離れて、たつた一人陽炎の中を河下の方へ歩き出した。（「素戔嗚尊」一）

高天原に集う若者たちが、天の安河での「容貌の醜い若者」（「素戔嗚尊」）の他を圧倒する才能に対して冷笑し、黙殺しことさらに能力の劣る「背の高い美貌の若者」の行為に対して賛辞を贈る構図は、あからさまにこの作品執筆時の作者の自画像に重なる。「背の高い美貌の若者」であった芥川龍之介は、学歴、職歴そして容貌、才能どれ一つ取っても世人の羨望の的であった。さらに彼のこの若さが同世代の若者の嫉妬、憎悪、憎しみを韜晦させる世俗的能力に欠けていた。羨望を韜晦させる為にこの時期の芥川龍之介が取った唯一の処世の術は、海軍機関学校を辞職し、大阪毎日新聞社友になり創作活動に専念した時に世事に長けた菊池寛を入社させることで自己の保身を図ったことぐらいである。

この辺の事情について福田恆存「芥川龍之介研究」では、明快に「素戔嗚尊」に投影された作者の自画像を分析している。私小説の伝統の強い日本の文学的風土においては、作者である作中主人公は、読者の反感を買わない為に、どじで野暮でおまけに人生の敗残者でなければならなかった。大方の広範囲の読者は、自分より人生の成功者を絶対に容認しない。年少にして高架に登り、群小の若者を天の安河で圧倒した素戔嗚尊は、自己の能力の誇示で天の安河で

天才故の孤独の寂しさを痛感する。しかし、素戔嗚尊が、日本の風土に身を浸して世評の為に、自己の能力を隠蔽したら世評の好感と一緒に自らの人格を喪失するだろう。翻って考えれば、芥川龍之介の生きた大正時代は、世評の嫉妬、憎悪、罵声も個人の素朴な個人的感情の域を出るものではなかった、幸福な一時期であった。大東亜戦争敗北で行き場を失った日本人の嫉妬心は、党によって結束し自由、平等の名前で相手が死に瀕するまで攻撃の手を緩めない。現在では、芥川龍之介が持っていた学歴、職歴、文学的才能とその成果の反映である名声まで、あるいは彼の端正な容貌、身長さらには田端の芥川邸まで私有財産保持の故に攻撃目標になり得る。無学歴で無残な職歴しか持ち得ず人生の嫉妬心のすべてを党に対する忠誠心で生きた老人は、芥川龍之介が持つ若さをも攻撃目標にするであろう。さらには、芥川文夫人の持つ夫に対する貞淑さも、優雅な身のこなしも嫉妬の対象となり得る。世人の名声に対していかに身をかわすかが、芥川龍之介文学の終始変らぬ主題であった。「鼻」(「新思潮」大正五年二月)「芋粥」(「新小説」大正五年九月)は、この主題を内包しているし最晩年の作品「西方の人」にも率直に記録されている。「素戔嗚尊」(一)の主題は、基督傳では明瞭に記載されている。つまり、芥川龍之介の文学的名声とその世評の自己に及ぼした結果についてのあからさまな記述である。「この海のやうに高まつた彼の天才的ジヤアナリズムは勿論敵を招いたであらう。」(「西方の人」十四)、「トルトイは彼の死ぬ時に『世界中に苦しんでゐる人々は澤山(たくさん)ある。それをなぜわたしばかり大騒ぎをするのか?』と言つた。この名聲の高まると共に自ら安(みづか やすん)じない心もちは我々にも決してない訣(わけ)ではない。」(「続西方の人」十四)

高天原の天の安河で多くの若者相手に力競べをし、抜群の力量で他を圧倒することで存在感を誇示する素戔嗚尊の孤独と誇り、また疎外感の為に孤独を覚える神代の英雄の姿には、作者自身の自画像が重なる。この疎外感、高天原で孤独を託つ素戔嗚尊の寂寥感が、芥川龍之介に田端の自宅を「我鬼窟」サロンに、さらに「澄江堂」サロンを文学道場にしたのである。結果的にこの彼の文壇生活が、彼を自殺に追い込んだ事を考えると彼の人生の悲劇は、自ら招いた性格悲劇である。芥川龍之介のこの文学軌跡は、周辺作家に甚大な影響を与えた。谷崎潤一郎は東京での文壇生活を捨て関西に移住、古典世界に耽溺して時流の流れから意識的に身を避けた。堀辰雄は、同じく東京を捨て軽井沢での生活を擬似西洋に見立てて虚構の亡命生活を送った。佐藤春夫は、芥川龍之介と同じく東京での文壇生活に生きたが、門弟三千人の身の処し方は芥川龍之介の文壇生活の反措定である。「素戔嗚尊」(「一」－「六」)の作品序章の叙述は、嫉妬と中傷の中で文壇人になるまでの作者自身の自叙伝である。

> ルツソオは告白を好んだ人である。しかし赤裸々(せきらら)の彼自身は「懺悔録(ざんげろく)」の中にも発見出来ない。メリメは告白を嫌つた人である。しかし「コロンバ」は隠約(いんやく)の間(かん)に彼自身を語つてはゐないであらうか?所詮(しよせん)告白文學とその他の文學との境界線は見かけほどははつきりしてゐないのである。(「侏儒の言葉」告白)

「素戔嗚尊」(「一」)には、天の安河で弓矢を競う若者たちの中で他を圧倒する素戔嗚尊の姿を最初に叙述する。これは、第一高等学校の学業で抜きん出ていた作者の自画像に重なる。天の安河の河飛び競技で素戔嗚尊より能力で劣る「背の高い美貌の若者」は、周囲の賞賛を浴びる。この美貌の若者は、第一高等学校で芥川龍之介と才を競った井川恭の可能性がある。能力で圧倒しても人望では、太刀打ち出来ない芥川龍之介の横顔が天の安河で疎外感を覚える素戔嗚尊の横顔に投影している。実母の愛を知らない芥川龍之介は、相手に対する求愛の限度を知らずに彷徨を繰り返して周囲に迷惑をかけ続けた。「自分一人だけが誰からも愛されたい(中略)このような弱点を持つ芥川が気の毒にさえもなったのである。」(江口渙「わが文學半世紀」)、この江口渙の個人的感想は久米正雄により裏づけられている。久米正雄「芥川がじつによく出ているそうじゃないか。あの男のあの

へんなところが・・・・・・」（「わが文学半世紀」作者の言葉）

2（「二」－「六」）

「素戔嗚尊」（「二」）は、井川恭と並びながら向凌生活を学業生活で競い合った頃から時期を経て夏目漱石の賞賛により文壇に登場する時期の痕跡をなぞっている。学業を離れ創作行為に生きる芥川龍之介を井川恭が、承認し力づけた痕跡も見られる。「精巧な勾玉や釧の美しさを誇つてゐる若者（中略）彼の失敗の為に、世間一般の弱者の如く、始めて彼に幾分の親しみを持つ事が出来た」（「素戔嗚尊」二）という記述がある。これは、吉田弥生との破局により自暴自棄になり遊郭通いを繰り返して、肉体不調になり井川恭の故郷松江滞在でかろうじて生の回復を成した芥川龍之介の生活体験の反映がある。人生の挫折、青春の蹉跌にも関わらず「鼻」「芋粥」で文壇登場を成した彼の能力を無視する若者の無関心は気にならなかった、芥川龍之介の若さがそれを成したのである。

それでもまだ容貌の醜い若者は、快活な心もちを失はなかつた。（中略）実際何処までも御目出度く出来上つた人間の一人であつた。（「素戔嗚尊」二）

この述懐には、文壇生活数年を閲したこの時期の芥川龍之介の苦い思いがある。こうして、素戔嗚尊は自分に能力で太刀打ちできる人物に遭遇することになる。彼は五、六人の頭角を顕した若者の中でも取り分け能力に秀でた者である。この人物の造型には、明らかに菊池寛の人物が投影している。

顔中鬚に埋まつてゐる、背の低い猪首の若者は、誰も持ち上げない巌石を自由に動かして見せた。（「素戔嗚尊」二）

五、六人の若者の群れの中で頭角を顕したこの者との力競べには、素戔嗚尊の素朴な闘争心がある。そして、圧倒的に優位にある者の落ち着きがある。背景にあるのは、薄田泣菫に依頼し、大阪毎日新聞者社友さらには、大阪毎日新聞社員になり旧友菊池寛にも同じ待遇を斡旋した事情がある。かつて、菊池寛が自信作「藤十郎の恋」を「新思潮」（「創刊号」）に寄稿した時、久米正雄と二人で掲載を拒否した芥川龍之介の菊池寛に対する優位は、この時も持続していた。同人雑誌第四次「新思潮」の同人仲間、久米正雄、菊池寛、松岡譲、成瀬正一等の中で唯一芥川龍之介にその才能で挑戦しうるのは、菊池寛唯一人であったが芥川龍之介はこの時期菊池寛に対して圧倒的に優位にあった。しかし、それは結局「新思潮」同人内部での優位であった。

それはこの二人の腕力が、外の力自慢の連中よりも数段上にあると云ふ事を雄弁に語つてゐる証拠であった。（「素戔嗚尊」三）

やがてこの仲間内の戦いは、複雑な様相をおびて来る。自ら切り捨てた菊池寛を抱きこむ程に芥川龍之介に対して方向転換を迫る事情が生じてくるからである。第一高等学校を放蕩無頼で放逐された倉田百三が「出家とその弟子」で千家元麿、犬養健ら「白樺」系の作家主催の同人誌「生命の川」に拠って名声を得て芥川龍之介の足元を脅かしてくるからである。倉田百三と共に学窓を離れた佐野文夫、犬養健にはこの時期政治家として萌芽が見られる。「素戔嗚尊」（「四」）以降の叙述は複雑な様相を帯びてくる。「素戔嗚尊」（「一」－「四十五」）の内、後半（「三十六」－「四十五」）を独立させて「老いたる素戔嗚尊」として「春服」（「春陽堂」大正十二年五月）に収録させたが、「春服」に収録させなかった「素戔嗚尊」（「一」－「三十五」）は、高天原を舞台にしているも「記紀」の典拠を離れ、作者の自由な空想の産物である。典拠を離れた自由な想像の産物は、作品的に価値がないと自ら後年認めた事になる。「素戔嗚尊」（「四」－「六」）は、「容貌の醜い若者」（素戔嗚尊）と「背の低い猪首の若者」、高天原で互いに他の大勢を圧倒した者同士の一騎打ちである。結果的に、素戔嗚尊はこの圧倒的な腕力でこの「背の低い猪首の若者」を屈服させる。高天原の天の安河に集うすべての若者の中で優位に立った時に、彼素戔嗚尊に訪れたのは、孤独、そして言い知れぬ寂寥感であった。この辺の記述には、文壇で名を成すに至るまでの芥川龍之

介の個人的な述懐が直接に反映している。

高天原の国の若者たちは、それ以来この容貌の醜い若者に冷淡を装ふ事が出来なくなつた。彼等の或一団は彼の非凡な腕力に露骨な嫉妬を示し出した。他の一団は又犬の如く盲目的に彼を崇拝した。更に又他の一団は彼の野性と御目出度さとに残酷な嘲笑を浴せかけた。最後に数人の若者たちは心から彼に信服した。(「素戔嗚尊」六)

ここに記述されているのは年少にして高架に登った芥川龍之介に対する周辺の人々の露骨な反応である。芥川龍之介に寄せられた賞賛、絶賛、嘲笑、憎悪が四種類に分けて綴られている。真に日本社会は、賞賛と憎悪の交差する社会である。最終的に素戔嗚尊に寄せられた周辺の人々の複雑なこの感情が、芥川龍之介を死に誘ったのである。素戔嗚尊の自覚した四種の反応は、自然主義の徳田秋声、早稲田派の広津和郎からの敵意であり、慶応の小島政二郎、蔵前工業の塩田良平等の他大学の崇拝者からの賛美であり、漱石山房に集う先輩作家たちからの嫉妬であり、或は「澄江堂」に集う龍門の四天王、無名の文学志望の青年達であった。結局は、この周辺の人々の憎悪、さらには賞賛までが芥川龍之介を自殺に追い込んだのであるが、個々の人々の感情も今日から見れば素朴な人間的な反応である。大東亜戦争敗北後に日本人の感性を支配したのは、嫉妬と憎悪を階級闘争の手段にしたイデオロギーである。日々変化し謎に満ちた不安と未知の世界を打開し、信念と確信を持って生存を保証し得る最良の道である。現実を客観的に認識し得ない、或は明日という未知の世界に不安を抱く子羊たちは、自己の内面を教条により武装し自らが描いた理想に合わせて世界を、人間を、そして未来から怒涛の如くに押し寄せる事象を把握する。そこにあるのは善と悪の原色の色彩に彩られた鮮明な彩である、自らが属する世界、自己の幻こそが正義であり、神の恩寵である。他は殲滅、焼き殺さなくてはならない悪の巣窟である。能無しの中年男にやる気を起こさせ、無能な老人に権力を譲与し、死に至るまで暴走行為をなさしむ源泉を天才ニーチェはルサンチマン(「ressentiment」)と名付けた。今日から見れば、素朴な人間的な感情の交差に苦しむ素戔嗚尊、芥川龍之介は人々の視線を避けて、天の安河の自然の内部に逃避する。しかし、孤独な寂寥の内部に生を営むことに困難を覚える。

彼は成る可く人を避けた。さうして多くはたつた一人、その部落を繞る山間の自然の中に時を過ごした。(中略)しかし－しかし彼は人間であつた。(「素戔嗚尊」六)

井川恭は、友人芥川龍之介が季節の移り変わりに誰よりも敏感に反応し、その情緒、意欲も四季の変化の内部で変貌した鋭い感性の持ち主との思い出を残している。芥川夫人の回想にも印象的な一文がある。第一高等学校時代に窓の外の木の葉の揺れに心を奪われて一瞬の動きを創作行為に留めたいという思いが、文学に向かわせたという追想である(「追想芥川龍之介」七)。

自然の内部にあっても癒されることのない彼の寂寥感は、終止彼を苦しめる。それは自らの魂を根底から抱きかかえてくれる母性の喪失感から来るのかも知れないと気付く。

彼はその寂しさが、何処から来るのだかわからなかつた。唯、それが何年か前に、母を失つた時の悲しみと似てゐるやうな気もちだけがした。(「素戔嗚尊」六)

沖本常吉「芥川龍之介以前－本是山中人－」(「東洋図書出版」昭和五十二年五月)には、最晩年自殺未遂を繰り返す芥川龍之介の緊迫した状況が、記録された。私小説で母親の喪失を読んだ芥川龍之介が、死に瀕した状況で自らの母性の欠如を嘆く場面を記録に残した。この時期の芥川龍之介は、自分を生に引き止めてくれる母性を切実に求めた「僕は時々幻のやうに僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人が一人、どこかから僕の一生を見守つてゐるやうに感じてゐる。」(「點鬼簿」二)

彼、素戔嗚尊は天の安河の川面を見やりながら、生の根源的な不安に捉われる。我は、どこから来て何処に去り行くのかという哲学的な思索に耽る。「彼は太い柏の枝へ馬乗りに跨がり

ながら、長い間その部落の空を渡つて来る風に吹かれてゐた。」（「素戔嗚尊」六）彼が、柏の木の上でつぶやくのは、自らの行く末についての根源的な疑問である。「素戔嗚よ、お前は何を探してゐるのだ。（後文省略）」（「素戔嗚尊」六）、この場面設定は、青木繁「わたつみのいろこの宮」の場面を想起させる。

3（「七」－「十」）

「素戔嗚尊」（「七」「八」）は、「素戔嗚尊」（「六」）末尾で天の安河を見下ろす小高い丘の上、柏の木の上でひと時を過ごす孤独な素戔嗚尊の夢を破る挿話である。

彼はその日も茫然と、目の下に白くうねつてゐる天の安河を眺めてゐると、意外にも柏の枝の下から晴れ晴れした女の笑ひ声が起つた。（中略）すると其処には三人の女が、麗らかな日の光を浴びて、木の上の彼には気がつかないのか、頻に何か笑ひ興じてゐた。（「素戔嗚尊」七）

この場面状況を描写するのに力があったのは、明らかに青木繁「わたつみのいろこの宮」の画像である。芥川龍之介が「素戔嗚尊」の主要場面を記述する上でこの名画の構図を参考にして叙述したことは、素戔嗚尊を「容貌の醜い若者」と設定したことで明らかである。さらに柏の木の下、天の安河の畔の「林間の空き地」に集う「三人の娘」と設定したのは、明らかに記述をなすのに依拠した「わたつみのいろこの宮」の構図から引き離そうとした芥川龍之介の意図的配慮の結果である。芥川龍之介が、青木繁「わたつみのいろこの宮」の画面の情景からこの「素戔嗚尊」（「七」「八」）の記述を生したことについては、いくつかの仮説がある。

藤島武二「天平の面影」（「白馬會」明治三十五年）は、翌年の青木繁「黄泉比良坂」に多大な影響を与えたが、青木繁の古代の神話に素材を得た創作は、「輪廻」（「明治三十八年」）、「享楽」「天平時代」（「明治三十九年」）、「大穴牟知命」（「明治四十年」）、「旧約聖書物語挿絵」「光明皇后」「日本武尊」（「明治四十一年」）と続いて「わたつみのいろこの宮」（「明治四十二年」）で頂点に達する。

「わたつみのいろこの宮」とは、言うまでもなく天孫族である山幸彦（「火遠理命」）が兄の海幸彦（「火照命」）の難題で失った針を探して海を渡って海神の娘、豊玉姫と宿命的に出会う場面である。伊邪那岐命が身罷った妻の伊邪那美命を追って黄泉国に行き、帰ってから汚垢を祓う為に禊をした時に生まれたのが、天照大神と建速須佐之男命である。この二人が、天の安河で最初に生んだ子供が天之忍穂耳命であり、その息子が皇孫邇邇芸命である。この天孫族の結婚したのは、天孫降臨の後で笠沙の岬で出会った先住民族の娘木花之佐久夜毘売であり、二人の間に出来た兄弟が海幸彦、山幸彦の兄弟である。芥川龍之介は、天孫降臨の子孫山幸彦が、海神の娘豊玉姫と出会う場面を借用して彼にとっては曾お祖父さんである素戔嗚尊の高天原での出会いを記述した訣である。

夏目漱石は、「わたつみのいろこの宮」を展覧会で見てその感想を「展覧会に青木と云ふ人が海の底に立つてゐる背の高い姿を描いた。」（「それから」）と感想を作中に残した。芥川龍之介は、生前の夏目漱石から直接青木繁「わたつみのいろこの宮」についての感想を聞いたか、あるいは「それから」を読んで示唆を受けたか、あるいはさらに遡って青木繁に影響を与えた藤島武二が、雑誌「明星」の挿絵を長年担当したことから「明星」を介して藤島武二に親しみ、さらに青木繁に接近した可能性がある。この辺の明治浪漫主義の文学と絵画との関係、青木繁の個人的状況については今日では、松本清張「私論青木繁と坂本繁二郎」（「新潮社」昭和五十七年七月）に詳しい。松本清張の青木繁に対する興味は、漱石「それから」からとは考えられない、芥川龍之介を介してのものだと思う。

即ち、其の香木に登りて座しき。爾くして、海の神の女豊玉毘売の従婢、玉器を持ちて水を酌まむとする時に、井に光有り。仰ぎ見れば、麗しき壮夫有り。（「古事記」上巻）

上記の記述が、青木繁「わたつみのいろこの宮」の依拠したところの「古事記」に記録された山幸彦の海神の国訪問の印象深い場面で、こ

の後山幸彦は日の神の子孫として天孫族ではない海神の娘、豊玉毘売と運命的に邂逅する。日嗣の御子と海神の娘との間に出来た子が、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命であり、豊玉毘売の妹である玉依毘売と結婚して神倭伊波禮毘古命（神武天皇）を生む。

「素戔嗚尊」（「七」－「十」）で描かれているのは、高天原を舞台に素戔嗚尊の一人の美しい少女に寄せる恋愛、そしてそれに付随して起きる若者たちの諍である。今日、この箇所を読むと芥川龍之介の明治から大正にかけての日々を、向陵時代の再現を見るようである。柏の梢の上から若い女性の声を聞くという設定が、古典的牧歌的邂逅が今日からは失われた設定である。向陵時代、府立三中から第一高等学校そして東京帝大時代と常に男社会で生きてきた知的エリートにとって、自己の属する組織に女人の気配がない事に気付かされる。この男社会で生き抜いてきた経歴が、芥川龍之介に生涯終わることのない闘いの日々を強いた。死に至るまで奮闘、安らぐことのない日々を要求した。そして、この経歴が人生の途上で思わぬ陥穽に彼を誘い込むのである。二人の子持ちの淫乱な人妻秀ひで子との愛欲の日々である。怠け者で遊び人であった南部修太郎は、簡単な火遊びで彼女との関係を清算したし、世慣れた広津和郎は最初から年増の人妻の誘いに乗らなかった。一人、芥川龍之介のみが、窮地に追い込まれて死に瀕することになったのである。すべては、男社会、競争社会でのみ生き抜いてきた芥川龍之介の持った社会的弱点であった。

> 殊にその一人の若者は、彼を崇拝する若者たちの中でも、殆奴僕の如く彼に仕へる為に、反つて彼の反感を買つた事がある男に違ひなかつた。（「素戔嗚尊」九）

人生は、ブーメラン（「boomerang」）のように同じ事象の繰り返しである。東京府立第三中学校（「両国高校」）で繰り広げられた山本喜誉司、平塚逸郎、能勢五十雄との交友は、後年「我鬼窟」でさらには「澄江堂」のサロンで繰り返された。そして、第三中学校で展開された愛憎半ばする交友は、田端の芥川邸で何度も繰り返されることになるのである。そして、芥川龍之介のすべての人生で完全に欠如しているのは、対等な立場で彼と談話をすることの出来る女人の存在である。

最晩年、迫り来る死を意識した芥川龍之介は、「澄江堂」サロンの人間関係の縮図を十五年以前の交友関係の再現に反映して見せた。府立三中、卒業後に第六高等学校に入学するも腎臓結核で天涯孤独でなくなった平塚逸郎を写した「彼」（「女性」昭和二年一月）である。「彼」の作品末尾の感慨、「勝利者」の感想は、「手帳」（「二」）冒頭「一月二十七日」の記述から見る限り芥川龍之介自身のものであった。天涯孤独の彼、平塚逸郎が社会科学の階級闘争に生き甲斐を見出す下りは、大正期の素朴な社会主義を昭和初期の過酷な階級闘争の視点で記録した。しかし、「素戔嗚尊」（「九」）において記述されたのは、府立第三中学校時代の狭い交友関係で繰り広げられた利己主義を内に秘めた素朴な友情、戦いである。

4（「十一」－「十三」）

素戔嗚尊は、高天原の多くの若者を敵に廻さなくてはならなくなった。これらの高天原の若者達は、素戔嗚尊に敵意を抱く一方で高天原の年長者である知恵者、思兼尊と勇者である手力雄尊に対しては、尊敬の気持ちを抱いている。そして、この二人の高天原の有力者は、意外なことに素戔嗚尊に対してむしろ好意を持っているらしいのである。この状況設定は、「漱石山房」での芥川龍之介の身近な体験の反映であろう。「古事記」で活躍する男女の最初の神様は、言うまでもなく伊邪那岐命と伊邪那美命の二柱の神々である。しかし、それ以前に独神が何代も続いた。高天原の造化の三神は、高皇産霊神、天御中主神、神皇産霊神である。思兼尊（「思金神」古事記）とは、この高皇産霊神の子で、天照大神が天の岩屋に隠れた時に誘い出す手段を講じた思慮深い神である。そして手力雄尊とは、言うまでもなく天の岩屋に隠れた天照大神を引き出すのに一役買った大力の神で、やがて天照大神と素戔嗚尊との間に出来た男神、天之

忍穂耳命の息子邇邇芸命が天孫降臨を実行するときに随伴者になる。

素戔嗚尊の好意を寄せる娘は、この思兼尊の姪であることが判明する。高天原で天照大神の側近として高天原の采配に預かる彼もこの時は、すでに老いて若い血気盛んな素戔嗚尊に対して思慮に欠けて突っ走ることの出来る利点について述懐する老人である。

「人間が鉤を恐れてゐる内に、魚は遠慮なく鉤を呑んで、楽々と一思ひに死んでしまふ。私は魚が羨しいやうな気がしますよ。」（中略）「わからない方が結構ですよ。さもないとあなたも私のやうに、何もする事が出来なくなります。」（「素戔嗚尊」十二）、この場面での若い素戔嗚尊と年老いた思兼尊のやり取りは、生前の夏目漱石と芥川龍之介との漱石山房でのやり取りを彷彿させるものがある。今日から見れば、人生の年輪の回転の速かった当時、人生五十年の時代にあって芥川龍之介も人生を、創作を生き急いだ。文学上の弟子に与えた書簡には、ぐずぐずしていると文学青年ではなくて文学老年になってしまうという芥川龍之介の叱咤激励の言葉を残している。

5（「十四」－「十七」）

素戔嗚尊の取り巻きの若者の一人が、彼から預かった勾玉を件の少女に求婚の印として贈るが、結果的にこの試みは勾玉がすり替えられることで水泡と化す。誤解により相手の愛を得られなかった事情を知らない素戔嗚尊は、一時期幸福の余韻に酔うのである。この辺の記載事項は、吉田弥生との愛を確信しながら一方的な確信の為に、あるいは社会生活を経験しない人生経験の未熟の為に破局に至った芥川龍之介の個人的な経験が反映しているだろう。

が、やがて素戔嗚は頸に懸けた勾玉の中から、美しい琅玕の玉を抜いて、無言の儘若者の手に渡した。それは彼が何よりも、大事にかけて持つてゐる、歿くなつた母の遺物であつた。（中略）「この国の物ぢやない。海の向うにゐる玉造が、七日七晩磨いたと云ふ玉だ。」（「素戔嗚尊」十五）

素戔嗚尊の「歿くなつた母の遺物」というからには、これは事実関係では産褥熱で黄泉の国に退去した伊邪那美命の遺品ということである。黄泉の国からこの世に退避せんとする伊邪那岐命は、八種の雷神に追いかけられるも十拳剣を振り回して黄泉比良坂まで逃げ切る。この「古事記」に記述された事項と以下の記述には齟齬がある。「この国の物ぢやない。海の向うにゐる玉造が、（後文省略）」という説明は、皇孫邇邇芸命が高天原から天孫降臨の後にその息子である山幸彦が結婚した海神の娘豊玉毘売のさらには、その息子が同じ海神の娘玉依毘売と結婚した事象に借りて来ている可能性がある。

「素戔嗚尊」（「十四」－「十七」）で描かれているのは、素朴な青年素戔嗚尊の高天原での恋の挫折である。高天原に住まうすべての若者を力競べで圧倒して優位に立つ彼であったが、醜い容貌のために相手の少女に対して積極的に出られない。こうした状況が、彼素戔嗚尊が恋の喪失者になる要因、間隙となった。自分を崇拝する若者に母の形見の勾玉を預けることで恋の仲立ちを頼むという愚をおかし、素戔嗚尊が信頼を寄せる若者は、勾玉を他の粗雑なそれに交換して相手の少女に贈る。貴重な勾玉は、素戔嗚尊の若者に対する信頼を犠牲にして、馬に交換されて若者の財産を増やすことに貢献する。彼は、自分の少女に対する素朴な恋心が、こけにされていることに気付くことなく至福のひと時を過ごすのである。腕力で高天原を圧倒したという自信が、周囲の者達の利権で動き回る現実を見えなくしているのである。こうした恋愛についての図式的失恋の構図は、夏目漱石「心」を下地にしても書くことが出来るが、細部には、芥川龍之介の個人的体験の反映がある。

彼の心の中には、今までにない幸福の意識が波立つてゐた。河原蓬も、空も、その空に一羽啼いてゐる雲雀も、悉く彼には嬉しさうであつた。（「素戔嗚尊」十七）

高天原の英雄の救われ難いほどにお目出度いこの描写には、学力で他を圧倒した芥川龍之介が自己過信から吉田弥生を永遠に喪失した傷の幾分かの投影がある。富田砕花「芥川君を想ふ」

(「改造」昭和二年九月）に拠れば、芥川龍之介はこの自分の崇拝者たるべき友人に最後の望みを託して吉田弥生との斡旋を依頼したのだった。「嫁いだとなつてから一層その熱情は昂まつたやうに思へた、私の記憶にして誤謬が無いならばその婦人の結婚式の前日、当時、中渋谷にゐた私のところで二人は最後の会見をしたとおもふ。」、長年親しく接してきた吉田弥生との破局が、精神的外傷となって彼の来るべき人生の行く手を遮るとは、芥川龍之介自身予想外のことであった。「素戔嗚尊」に描かれたこうした一挿話にも彼の心の傷痕の軌跡を見ることが可能だ。

意中の女人、思兼尊の姪の話題で過去の記憶の断片が、風景と一体になって彼の想起を助ける描写がある。興味の対象外の女人を記憶することは、予想外の努力を要求する。しかし、これに反して意中の女人を忘れようとすることは、逆効果であり、忘れようとする努力が記憶を鮮明にする。全体的な記憶として、どうでもいい人間の顔は簡単に想起することが出来るが、意中の人の顔は全体的に思い出を拒む場合もある。この時の手助けになるのは、人物と一体化した風景の断片である。

> 彼の記憶には二三日前に、思兼尊と話し合つた、あの古沼のほとりの柳の花が、忽ち鮮に浮んで来た。(「素戔嗚尊」十四)、「が、彼の顔を見ると、彼女は急に脣を歪めて、蔑むやうな表情を水々しい眼に浮べた儘、昂然と一人先に立つて、彼の傍を通り過ぎた。(「素戔嗚尊」十七)

意中の女人についてのこの種の些少な描写は、作者の創作行為の流れから無意識に紡ぎだされた言葉ではない。葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」(「粉雪」）には、編者の推定で大正三年頃と思われる芥川龍之介により視覚的に把握され、記録された吉田弥生の行為の断片が、背後の家具類の記憶と相まって描写された。

6 (「十八」－「二十二」)

思兼尊の姪に渡したはずの勾玉を偶然の機会に別の若者の胸に発見した素戔嗚尊は、怒りを爆発させる。「醜い山鴉が美しい白鳥に恋をして、ありとあらゆる空の鳥の哂ひ物になつた」「既に美しい白鳥は、醜い山鴉の恋を容れてくれた。」(「素戔嗚尊」十八)、世間の評価に関わらず一方的に自分の都合に良い方向に理解を及ぼす素戔嗚尊の姿は、雑誌「白樺」の愛読者であった芥川龍之介にとっては、武者小路実篤「お目出たき人」(「洛陽堂刊」明治四十四年二月）の愛読経験が蘇った結果かも知れない。

母の形見の勾玉を身に着けた若者を引きずり、自分を裏切った牛飼いの若者の小屋に引き連れて行く素戔嗚尊は、逃げようともがく背の高い、勾玉を身に着けていた青年を小屋の中に投げ込む。この描写は、精彩に富む箇所であるが、芥川龍之介の何らの経験、体験とは無縁の描写である。おそらくは、年少からの文学愛読の蓄積の結果得た、才能であろう。

> 襟をつかまれた若者は、丁度この戸口の前へ来た時、始めて彼の手から自由にならうとする、最後の努力に成功した、と思ふと時ならない風が、さつと若者の顔を払つて、足さへ宙に浮くが早いか、あたりが俄に暗くなつて、唯一しきり火花のやうな物が、四方へ散乱するやうな心もちがした。(「素戔嗚尊」十九)

素朴、そして単純な素戔嗚尊をたぶらかせた二人の若者を相手に乱闘を繰り広げる内に素戔嗚尊に味方する者達も参加して両派入り乱れての大乱闘になる。高天原を二分しての党派争いに発展する物語展開であるが、典拠「古事記」にその片鱗がある。伊邪那岐命が禊をして左の目を洗って生まれたのが天照大神で、右の目を洗って生まれたのが建速須佐之男命（「素戔嗚尊」）であるが、天照大神には高天原を統治させ、建速須佐之男命には海原を統治させた。「汝が命は、海原を知らせ」(「あなたは海原を治めなさい」）という委任に対して「八拳須心前に至るまで、啼きいさちき。其の泣く状は、青山を枯山の如く泣き枯し、河海は悉く泣き乾しき。是を以て、悪しき神の音、狭蠅の如く皆満ち、万の物の妖、悉く発りき。」(「成人して長い鬚がみぞおちのあたりにとどくまで泣きわ

めいた。その泣くさまは、青々とした山を枯れ山のように泣き枯らし、河や海はすっかり泣き乾してしまつた。そのため悪しき神の声は、五月ごろわき騒ぐ蝿のように満ち、あらゆるわざわいがすべて起った。」)

高天原を二分する騒動は、素戔嗚尊が周囲から誤解されたことから生じた出来事であるが、それも「古事記」に依拠している。「然らば、天照大御神に請して罷らむ」(「それならば、天照大御神に申して根之堅州国へ参ろう」) という素朴な感情が、天照大神の誤解を受けて高天原の一大騒動に発展するのである。素戔嗚尊の天照大神に対する言い訳の口上は、「僕は、妣が国に往かむと欲ひて、哭く」(「私は亡き母の国へ行きたいと思って泣いているのです」)、さらに素戔嗚尊の高天原からの追放は、伊邪那岐命の意向から発した処置であることが、素戔嗚尊の自身の発言から知られる。「汝は、此の国に在るべくあらず」(「お前はこの国にいてはならない」)。

高天原の動乱に際して思兼命は別段に何の反応を示すことなく、両派を調停することもない。思兼尊は、姪を労わりながら考え深い目つきをしてつぶやく。

「火を弄ぶものは、気をつけないと、ー素戔嗚尊ばかりではない。火を弄ぶものは、気をつけないとー」([素戔嗚尊] 二十二)

この思兼尊の独白の意味するものは何か。高天原から天孫降臨を成す、皇孫の息子山幸彦が、海神の娘豊玉姫と結婚して、神武天皇の父を産む。その状況は、「爾くして、即ち其の海辺の波限にして、鵜の羽を以て葺草と為て、産殿を造りき。(「そこで、ただちにその海辺の渚に、鵜の羽で屋根を葺いて産屋を造った。」)、民俗学伝承ではこの産屋では、火が重要な役割を果たす。思兼尊の姪を労わりながらの発言は、素戔嗚尊にとって、そのひ孫が経験する人生上の苦言を呈したことかも知れない。

7 (「二十三」)

大勢の敵対者に囲まれてさすがの素戔嗚尊も生け捕られて、死を免れたものの高天原から追放されることになる。決して殺されなかったのは、思兼尊と手力雄尊二人の思慮深い配慮による。

彼等はまづ彼の鬚を、一本残らずむしり取つた。それから彼の手足の爪を、まるで貝でも剝がすやうに、未練未釈なく抜いてしまつた。(「素戔嗚尊」二十三)

この辺の記述は、典拠「古事記」(「須佐之男命の追放」) の記載事項をそのまま使っている。異なるのは、高天原の敵対者により殺されるところを高天原の二人の知恵者の特別の配慮で追放に処せられることである。この箇所は、「古事記」では、八百万の神々の合議で追放されたと記述されている。

是に、八百万の神、共に議りて、速須佐之男命に千位の置戸を負ほせ、亦、鬚と手足の爪を切り、祓へしめて、神やらひやらひき。(「古事記」上巻)

(「そして、すべての神々は一緒に相談して、速須佐之男命にたくさんの祓えものを背負わせ、亦鬚と手足の爪とを切り、罪をあがなわせて、神やらいに追い払った。」)

こうして生まれ故郷である高天原を追放になった素戔嗚尊は、死を免れて一人孤独の独白の世界の住人となる。手力雄尊は、素戔嗚尊の自分のそれを凌ぐ腕力に敬服したからであり、思兼尊は人を殺すことを忌む性格から彼を助ける。この思兼尊の本来持つ属性は、日本民族の根源的性向になったようである。

「素戔嗚よ。お前は何をさがしてゐるのだ。おれと一しよに来い。おれと一しよに来い。素戔嗚尊よ。・・・・・・」(「素戔嗚尊」二十三)

高天原に生活する日々の日常生活の中で、生の意味を問う根源的な不安が彼に付き纏う。素戔嗚尊に安住することを許さないこの呼びかけは、どこから来る声か。いうまでもなく母の不在から来る芥川龍之介の生の不安から来る呼びかけである。自己の精神の在り処を求める声は、素戔嗚尊に故郷である高天原での安住を許さない。

8（「二十四」－「二十八」）

流浪の果てに素戔嗚尊は、女だけの死の世界の住人が住む穴居部族の生活圏に至る。かつて、佐藤春夫は谷崎潤一郎の文学について「潤一郎は作の全部では事実を述べないが、細部では事実をそのまま用ひてゐることがよくある。」（「潤一郎、人及び藝術」）と私見を述べたが、芥川龍之介についても同じことが言える。高天原でその強力で他を圧倒しながら思兼尊の姪に対する思いは遂げることは出来なかった。高天原追放の後に、素戔嗚尊は大気都姫とその他十五人の女たちとの放縦な生活を送ることになる。

大阪毎日新聞連載小説「素戔嗚尊」について作者が、自伝小説の要素があるということについては明らかな傍証がある。つまり、吉田弥生との思わぬ破局その結果として遊郭通いによる肉体的衰弱、そして井川恭の勧めで実行された三週間の松江旅行による健康の回復である。芥川龍之介のこの時期の精神的、肉体的危機は真に深刻な様相を見せていて、失地回復は至難の技であった。死に瀕した精神の回復のための創作行為が、彼に新たな人生の展望を与えた。先に、わたしは芥川龍之介の人生軌跡についてブーメラン（「boomerang」）のようにという比喩を用いたが、この時期と同じ危機は再度芥川龍之介を襲ってきて最終的に彼を死に導くのである。この時期の精神的危機、肉体的衰弱についてつぶさにその状況を知っていた井川恭は、最晩年の芥川龍之介に会ってその危機を予感した回想文を残した。

> そして鵠沼の居に芥川をおとづれ、久し振りに話し合つた。それが永久の別れであつた。鵠沼の駅に向ふ車の上で、ふと、此れきりでもう会へないのぢやないかしらと云ふやうな予感があたまの中に閃いた。（「友人芥川の追憶」一）

二十代前半から後半にかけての芥川龍之介の個人的な愛の軌跡についての知識を有する友人にとっては、故郷高天原を捨て穴居部族の中に下放されて放蕩三昧に耽る素戔嗚尊の人生行路は、友人芥川龍之介の過去の精神遍歴である「この頃スサノヲ先生も念入りに書いてゐる目下先生は太古の放蕩を始めた所だ」（「南部修太郎宛書簡」大正九年五月九日）。

素戔嗚尊の典拠である「古事記」に拠れば、至福の地である高天原を離れて大和民族は、何度か転戦を繰り返すが、目的地はさらに生活の向上を求めての移住である。皇孫邇邇芸命が天孫降臨の地として降り立ったのは、高千穂の峰である。この皇孫は、笠沙の岬にいた先住民族の娘木花之佐久夜毘売と結婚しているが、笠沙の岬が高天原より劣悪の地でなかった証明である。さらにその息子は、異民族海神の娘豊玉毘売と結婚しているが、この海神の娘の異郷がどこであるか分らないが、この地も高天原より劣悪な環境であったとは考えられない。さらに天孫降臨の邇邇芸命の孫が、同じく海神の娘玉依毘売の結婚により生まれた四人目の子供が、九州から大和に転戦した神武東遷の主人公である。結果的には、大和民族は高天原を離れてから不退転の決意で古代の桃源郷を目指していたことは確実である。劣悪な生活環境より、生活水準の高い地を求めて転戦した最終的な到達点が、大和樫原神宮の現在地であった訣である。すると「素戔嗚尊」（「二十四」－「三十二」）に描かれた世界は、何処か。産褥熱で身罷った伊邪那美命が退去した地、黄泉国である。黄泉国から退避、逃走する伊邪那岐命を八種の雷神と邪神豫母都志許売の追撃を黄泉比良坂で防ぐのは桃（「意富加牟豆美命」）である。

「素戔嗚尊」（「二十四」－「二十八」）で描かれているのは、素戔嗚尊の大気都姫とその十五人の妹との放縦な性生活を描く。言うまでもなく、この辺の記述は真に客観的に素戔嗚尊にとっては危機的状況であるが、どこか余裕のある記述になっているのは、これを背後で支えている作者の体験が過去の出来事になっているからである。すなわち、作者にとっては生命を喪失すべき危機、大正三年夏に千葉県一宮に滞在中に吉田弥生に対して最初に愛の書簡を贈ってから翌年春に愛の対象を喪失した後、松江旅行により本然の我を取り戻すまでの半年間の放蕩生活を下地にしているからである。「素戔嗚尊」（「二十四」－「二十八」）で描かれているのは、

作者自身の五年前の切実な体験の反映である。

「ある女を昔から知つてゐた　その女がある男と約婚をした」（「井川恭宛書簡」大正四年二月二十八日）、「イゴイズムをはなれた愛があるかどうか」（「井川恭宛書簡」大正四年三月九日）という書簡がその精神的危機の何たるかを教えてくれる。「うちへかへつて『丁度うまく汽車が間にあつてね、十時五十何分かに品川から立ちましたよ』と云つたら『さうかい』と云つて、母や伯母が涙を流した。」（「井川恭宛書簡」大正四年四月十四日）という今日残された書簡から、芥川龍之介が精神の危機を官能の充足で乗り切ったことが知られる。そして、同時期に別の友人に書き贈った何首かの和歌が全集に収録されているが、「かばかりに苦しきものと今か知る『涙の谷』をふみまどふこと／わが心やゝなごみたるのちにして詩篇をよむは涙ぐましも」などは、十年後に再度芥川龍之介に訪れる精神的危機の状況との類似を示す。さらに遊郭での生活断片を思わせる「いやしみしわが心よりほのぼのと朝明の光もれ出でにけり」という歌もある。全集未収録であるがこの時期の遊郭生活を対象にした即物的な和歌数種も最近紹介されている。

十六人の女たちは、時々彼を奪ひ合つて、互に嬌嗔を帯びた声を立てた。が、大抵は大気都姫が、妹たちの怒には頓着なく、酒に中つた彼を壟断してゐた。（「素戔嗚尊」二十六）

この記述は、品川の遊郭での彼自身の率直な経験の反芻でなければならない。つまり、主として大気都姫と思しき姉御株の相方が芥川龍之介の相手をしていて、それを周辺の十五人の女たちが羨んだという構図である。さらに、遊郭での体験の苦い思いを噛み締める翌日の朝の自身の感性までもが率直に綴られている。

すると気違ひじみた昨夜の記憶が、夢の如く眼に浮んで来た。と同時に又妙な腹立たしさが、むらむらと心頭を襲ひ出した。「畜生。」（「素戔嗚尊」二十七）

この辺の記述には、芥川龍之介の品川の遊郭での放蕩三昧の生活の実態を即物的に記述している。執着と離反、愛憎の混雑したその感情の率直な発露は、先輩作家谷崎潤一郎の創作行為より自然主義的である。「メリメは告白を嫌つた人である。しかし『コロンンバ』は隠約の間に彼自身を語つてはゐないであらうか？」（「侏儒の言葉」告白）、むしろ芥川龍之介ほどに「隠約の間」の告白を好んだ作家はいないくらいである。行間に埋もれた生の声を聞くという行為こそ芥川龍之介文学熟読の甘味である。

この山々と森林とを眺めてゐると、彼は急に洞穴の空気が、嘔吐を催す程不快になつた。（「素戔嗚尊」二十七）

後年、芥川龍之介は「一切の議論は灰色で、緑なのは黄金色の生活の樹」（「文藝雑感」大正十一年一月十八日）という「色彩論」からの思想の摂取を見せたが、こうしたゲェテの警句集からの素朴な摂取ではなくて、そこには彼個人の生活経験の裏付けがあったと思われる。自然で健康な営みに導かれて、洞窟に巣くう十六人の女達の誘惑を脱して「洞穴の前に懸つてゐる藤蔓の橋を渡らうとした。」（「素戔嗚尊」二十七）彼は、大気都姫の媚態を帯びた声で呼び戻される。おそらくは、こうした場面は大正四年夏までの数ヶ月間に品川の遊郭で芥川龍之介自身が何度も経験したことであろう。そして、以下に興味深い記述箇所がある。

それ以来素戔嗚は、この春のやうな洞穴の中に、十六人の女たちと放縦な生活を送るやうになつた。一月ばかりは、瞬く暇に過ぎた。（「素戔嗚尊」二十八）

ここで具体的記載されている二つの数字に注目すべきである。「十六人」「一月」とういう数字は、虚構の世界のそれではあるまい。つまり「十六人」は芥川龍之介が品川遊郭で馴染んだ女の具体的な数である。さらに、大正四年夏の三週間に及ぶ松江紀行以前に彼が品川遊郭に入り浸った年月は「一月」であるということも判明する。こうして彼、素戔嗚尊は一日洞窟からの脱出を試みるのであるが、からくもそれは失敗する。脱出の動機は、放蕩生活に疲れた彼の視線に故郷高天原が、映じたからである。そしてその脱出の試みが失敗したのは、十六人の女達の彼を誘う笑い声であった。

しかし或夜夢の中に、彼は山上の岩むらに立つて、再び高天原の国を眺めやつた。（中略）急に云ひやうのない寂しさが、胸一ぱいに漲つて来た、さうして思はず、声を立てゝ泣いた。その声にふと眼がさめた時、涙は実際彼の頬に、冷たい痕をと止めてゐた。（「素戔嗚尊」二十八）

洞窟の中での女達との営みの日々で夢中で涙を流す素戔嗚尊が、何故に涙するかと言えば、十六人の女達との放縦な日々に幸福の象徴である故郷高天原の幻影が視界を横切ったからである。この場面は机上の作り物とは思われない。おそらくは、芥川龍之介の遊郭での実体験であろう。しかし、彼の帰るべき田端には彼の苦悩を受け止めてくれる母性は存在しない。欲望の充足で局面する危機を乗り越えた彼は、再度十年後に同じ状況に追い込まれた時に成すべき手段を持ち得なかった。

ところで大気都姫とは何者か、吉田精一篇「筑摩全集類聚芥川龍之介全集」の脚注では次のような説明をしている。「記紀には素戔嗚尊が食物を求めた時、この神が鼻や口や尻から種々の御馳走を取り出したので、それを隙見した尊が怒って殺したところが、その身体から、蚕や稲の種や粟や小豆や麦や大豆が出来たとある。」（「大気都姫」）、大気都姫は「古事記」の記録に拠れば、葦原中国に生まれているが、素戔嗚尊が出雲に降る前に高天原で殺されている。この「古事記」の記載事項で確認する限りは、大気都姫はその出自は葦原中国であるが、その生活空間は高天原ということになる。彼女の住む洞穴は、典拠に拠れば高天原の一部であるという設定である。しかし、細部の記述の些少な箇所からは、洞窟は黄泉の国である。依拠した素材を資料として客観的に使用する意欲は、作者にはなかったであろう。

9（「二十九」－「三十二」）

素戔嗚尊は、大気都姫の住む洞穴から脱出を試みるも結局、一日で舞い戻って来てしまう。これも芥川龍之介自身の品川遊郭での実体験であろう。そして次に記述されている内容も作者の遊郭での実感なくして記述し得ない内容を持っている。遊郭で彼を接客した人々が、身を捨てての歓待にも関わらず、不在の彼の存在に何ら心を動かされた形跡が無いことである。

寧ろ彼等は始めから、或不思議な無感受性を持つてゐるような気がするのであつた。（中略）が、更に一月ばかり経つて見ると、反つて彼はその為に、前よりも猶安々と、何時までも醒めない酔のやうな、怪しい幸福に浸る事が出来た。一年ばかりの月日は、再び夢のやうに通り過ぎた。（「素戔嗚尊」二十九）

この引用箇所に「一年ばかりの月日」という記載事項があることに注意すべきである。この限定された年月も虚構の月日ではあるまい。大正四年春、吉田弥生の喪失を埋める為に実行された芥川龍之介の遊郭通いは、大正四年夏の松江紀行を挟んで彼の東京帝国大学英吉利文学科の最後の年まで継続していたことが知れるのである。さらに、引用の一文に続いて次のような興味深い記述がある。この出来事も遊郭で彼が経験した実体験であろう。

或夜彼が又洞穴の奥に、泣き顔を両手へ埋めてゐると、突然誰かが忍びよつて、両手に彼を抱きながら艶めかしい言葉を囁いた。（中略）いきなり相手を突き放した。相手は一たまりもなく床に倒れて、苦しさうな呻吟の声を洩らした。－それはあの腰も碌に立たない、猿のやうな老婆の声であつた。（「素戔嗚尊」二十九）

引用箇所の後半部分は、おそらく忘れることの出来ないおぞましい経験として作品化、形象化し得ぬ限り芥川龍之介の、失地回復は不可能であったであろう。「それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。」（「羅生門」）、この印象深い描写について「この描写は原典にはない」（「吉田精一芥川龍之介集」頭注）という興味深い説明がある。典拠「今昔物語」（「巻第二十九第十八」）に無い描写、それではこの過激な行動は作者の経験の何処にあったのか、言うまでもなく数ヶ月以前の品川の遊郭での実体験である。こうした経験を積むことが出来たのは芥川龍之介の肉体と精神の荒々し

さである。これが、彼の文学に今日見て無限の可能性を与えた。この箇所には、素戔嗚尊が寵愛する十六人の女たちが彼の代わりに犬を代用している場面を彼、素戔嗚尊が目撃する場面がある。この行為が芥川龍之介の目撃談とは考えられない。彼が愛読した曲亭馬琴「南総里美八犬伝」に依拠しているのであろう。しかし、この挿話の原型は遊郭で相手方を未知の剽悍な男に奪われた彼自身の経験の可能性がある。

それ以来夜毎の酒盛りにも、十六人の女たちが、一生懸命に奪ひ合ふのは、素戔嗚ではなくて、黒犬であつた。(「素戔嗚尊」二十九)

こうした遊郭での個人的体験は、書くことで彼の肉体、精神を洗浄したであろう。しかし後年書きすぎを幾分後悔したことは、「素戔嗚尊」(「一」－「四十五」) 全体のうちで前半部分を書き捨てにして、後半部分「素戔嗚尊」(「三十六」－「四十五」) のみ独立させて「老いたる素戔嗚尊」として「春服」(「春陽堂」大正十二年五月) に収録した行為に拠り知ることが出来る。

素戔嗚尊が放蕩三昧を繰り返す高天原に隣接する洞窟の本体について、先に私は伊邪那美命が退去した地、黄泉国であるという説明ををなしたが、大気都姫については、典拠「古事記」の記載事項は以下のようなものだ。「次に、大宜都比売神を生みき」(「伊邪那岐神・伊邪那美神が次に生んだ神の名は、次に大宜都比売神を生んだ。」)、そして放浪する素戔嗚尊は、やがて火雷命に会うことになる。火雷命とは、言うまでも無く黄泉国に退去した伊邪那美命を殯宮に伊邪那岐命が訪問した折にその肉体に巣くっていた八種の雷神の一種、その胸に住みついていた雷神である。雷は「厳めしい恐ろしきもの」の意であるが、腐敗して蛆の湧いた肉体に宿る何かである。この自分の母の亡骸から派生した異形の者である火雷命に素戔嗚尊は、放浪の途中で遭遇する。素戔嗚尊の放浪する半身は、結局は高天原とそれに付随する黄泉国から出るものではない。時として彼は、黄泉国を放浪しながら故郷高天原の天の安河を眺望する。彼の住環境が、黄泉国であることを明瞭にするために作中に桃花の記述がある。

寝床には菅畳を延べる代りに、堆く桃の花が敷いてあつた。昨日から洞中に溢れてゐた、あのうす甘い、不思議な匂は、この桃の花の匂に違ひなかた。(「素戔嗚尊」二十七)

黄泉国から退去する伊邪那岐命を伊邪那美命は、豫母都志許売(「黄泉の国の醜い邪神」)に命じて追撃させる。伊邪那岐命は「黄泉比良坂」(「この世と黄泉国との国境である坂」)で迫り来る八種の雷神を桃の実三つを投げつけて撃退する。言わば、桃は自然の驚異と同じく素戔嗚尊に黄泉国からの脱出を促す幸福の予兆としての意味合いを持っている。従って随所に桃の花は書き入れられてその存在を主張している。「季節は夏に近かつたが、そのあたりの桃は相不変、谷間の霧の中に開いてゐた。」(「素戔嗚尊」二十九)、といった具合に書き入れられている。桃の存在と同時に素戔嗚尊に覚醒を促すのは自然の営みの強大さである。即ち、俗に言う禊である。そしてこの場合は、芥川龍之介の場合は明らかに実体験を伴うものであろう。彼が、誰よりも自然の移り変わりに対して敏感に反応したことは友人井川恭、夫人の回想に詳しい。

素戔嗚はずぶ濡れになりながら、未に汀の砂を去らなかつた。彼の心は頭上の空より、更に晦濛の底へ沈んでゐた。其処には穢れ果てた自己に対する、憤懣より外に何もなかつた。(「素戔嗚尊」三十一)

結局、素戔嗚尊は桃の花と禊の行為に導かれて放蕩三昧の黄泉国から脱出するのである。彼、芥川龍之介の場合は青年期に馴染んだ遊郭での生活体験を忘れることが出来ずに生涯この世界との縁は切れなかったようである。さらに素戔嗚尊に黄泉国からの脱出を促すのは、夢中の予兆として訪れる火雷命に促される高麗剣を抜く行為である。

彼は両手に柄を掴んで、渾身の力をこめながら、一気にその剣を引き抜いた。(中略)

「神神はおれを守つて居て下さる。」(「素戔嗚尊」三十二)

この挿話は、言うまでも無くアーサー王伝説

(「Arthurian Legend」) の有名な挿話の焼き直しである。先住民族ケルト王が、侵入するサクソン人侵入に抵抗した五、六世紀の話であるから、歴史的には高天原での素戔嗚尊が活躍した時期は数世紀早いであろう。

10 (「三十三」－「三十五」)

七年間の放浪生活を閲した後に遂に素戔嗚尊は、出雲の簸の川のほとりで足名稚の娘櫛名田姫に逢う。櫛名田姫はまさに高志の大蛇の生贄にされるところであった。

彼は風が囁く儘に、あの湖を後にしてから、丁度満七年の間、はてしない漂泊を続けて来た。(「素戔嗚尊」三十三)

素戔嗚尊は、高天原から追放になった後に「七年の間」という空白期間を経て出雲に出現する。天照大神とその直径の子孫、天孫族の支配する高天原と素戔嗚尊とその子供、五十猛命が支配する出雲族の両派対立の構図は、こうして成立した。高天原を捨ててからというもの素戔嗚尊は、いかなる異郷を見ても故郷としてとどまる気にはなれなかった。最終的に彼に安住の地を約束するのは、櫛名田姫の存在である。「素戔嗚よ。お前は何を探してゐるのだ。おれと一しよに来い。おれと一しよに来い。・・・・・・」(「素戔嗚尊」三十三)、高天原を追放になり天孫族と袂を分かった時以来の彼の放浪する半身に終わりを遂げさせるのは、出雲の地とそれに付随した土地の娘との結婚である。

それ以来彼はたつた一人、或時は海を渡り、或時は又山を越えて、いろいろな国をさまよつて歩いた。(「素戔嗚尊」三十三)

出雲の地に素戔嗚尊が、落ち着くのは七年の空白の後である。生活を充足させ得る地を求めて、高天原と同じくあるいはそれ以上の肥沃の地を探し出すのにそれだけの年月を必要としたということである。「日本書紀」の記載事項に拠れば、「一書に曰はく、・・・・・・」として、素戔嗚尊が高天原から追放された後に息子、五十猛命とともに新羅の国の曾尸茂梨という場所に止まった記録を載せる。この時に素戔嗚尊はこの新羅の土地について「此の地は吾居らまく欲せじ」(「この地に自分は降りたいと思わない」) という台詞を残した。この辺の事情について「素戔嗚尊」は、典拠「日本書紀」の記載事実を十分踏まえて書いている。

それらの民に一臂の労を借してやつた事はあつても、それらの民の一人となつて、老いようと思つた事は一度もなかつた。(「素戔嗚尊」三十三)

「素戔嗚尊」では、高天原を追放になった後に黄泉の国と思しき土地で放蕩三昧に耽る訣だが、典拠「日本書紀」には素戔嗚尊とその息子、五十猛命が何故に新羅の国に止まることなくして出雲の国に安住の地を見出したか、その理由を明瞭に記載している。「初め五十猛神、天降ります時に、多に樹種を将ちて下る。然れども韓地に殖ゑづして、尽に持ち帰る。」(「初め五十猛命が高天原から降った時には、沢山の樹木の種子を持って下りて来た。しかしこの樹木の種子を韓国に植えないで、すべて持ち帰りました。」) 素戔嗚尊は、「七年の間」黄泉の国を思わせる地で放蕩三昧の生活を送るが、この地は遥かに高天原の天の安川を眺望出来得る場所である、無論夢の中の出来事であるが。「しかし或夜夢の中に、彼は山上の岩むらに立つて、再び高天原の国を眺めやつた。」(「素戔嗚尊」二十八)、芥川龍之介の脳裏にあって素戔嗚尊が、七年の間を放蕩に費やす地は高天原に隣接した土地であるという認識があったようだ。この地は、依拠した「日本書紀」の記載事項に拠れば、新羅の曾尸茂梨である。そしてこの土地に七年間滞在しながら彼、素戔嗚尊は土着の者としてかの地に人生を終わるつもりは無かった「此の地は吾居らまく欲せじ」(「日本書紀」)。この歴史的事実は、明らかに「素戔嗚尊」に反映しているであろう。具体的には、新羅の曾尸茂梨は芥川龍之介が馴染んだ品川の遊郭の実態として描かれている。そして、「この山々と森林とを眺めてゐると、彼は急に洞穴の空気が、嘔吐を催す程不快になつた。」(「素戔嗚尊」二十七) という率直な感情は、品川遊郭の生活断片に対する芥川龍之介の赤裸々な感情である。しかし、これは高天原を追放されて以後出雲に定住する

までの素戔嗚尊の実感でもあったであろう。さらに、品川遊郭で深く馴染んだ大気都姫を切り殺して新たな地平を求める素戔嗚尊は、出雲の簸の川を遡ることで理想的な女人、櫛名田姫と運命的な出会いを成し遂げる。

櫛名田姫の両親は、脚摩乳、手摩乳であり、大事な娘が八岐大蛇の犠牲に供せられる時に現れた素戔嗚尊により救われる、この時に手に入れたのが三種の神器の一つ天叢雲剱（「草薙剱」）である。放蕩の限りを尽くした素戔嗚尊が、運命的出遭いを成す理想的な結婚である。

> 彼はその刹那にこの女が、夢の中にのみ見る事が出来る、例へばこの夏の夕明りのやうな、何処となくもの悲しい美しさに溢れてゐる事を知つたのであつた。（「素戔嗚尊」三十四）

作品「素戔嗚尊」の作中でこの辺りを記述している時に芥川龍之介の脳裏にあったのは、自身の結婚についての経験であったはずだ。放蕩生活に疲弊した素戔嗚尊が、出雲の簸の川を遡って運命の女櫛名田姫に出逢って結婚に至る条を書いた時に彼は、数年前の自身の精神史に思いを致した筈である。危機を察した友人井川恭の勧めで一夏を松江で過ごし、その見聞記を寄稿して文筆家として最初の契機を掴んだことである。「松江印象記」（「松陽新報」大正四年八月）と松江紀行とによって自らの人生の新生の契機を掴んだ過去の遍歴を想ったはずである。「僕には　僕の仕事があります　それも樂な仕事ではありません（中略）しかしどんな目にあっても、文ちやんさへ僕と一しよにゐてくれれば僕は決して負けないと想つてゐます」（「塚本文宛書簡」大正六年四月十八日）、つまり楚々たる風情の新妻を得るために果敢に危機に、襲い来る八岐大蛇に挑戦する箇所である。

> 驟雨の襲ひかかるやうな音が、対岸の松林を震はせながら、その上に疎な星を撒いた、山々の空へ上り出した。（「素戔嗚尊」三十五）

大蛇は、襲撃の予兆を以て岩の上に立ち竦む素戔嗚尊と櫛名田姫を襲い来る気配である。芥川龍之介の言う「僕の仕事が」二人の運命に襲い来る気配で終わる。

11（「老いたる素戔嗚尊」一）

「素戔嗚尊」（「一」－「四十五」）のうち「素戔嗚尊」（「三十六」－「四十六」）のみを切り離して「老いたる素戔嗚尊」として独立させて「春服」（「春陽堂」大正十二年五月）に収録させた。削除した前半部分が、素戔嗚尊に仮託した余りにも自己告白的で私小説的なのに比して後半「素戔嗚尊」（「三十六」－「四十五」）は、典拠「古事記」に依拠した一個の物語としての展開を見せている。

素戔嗚尊は八岐大蛇を酔い潰して成敗するが、この有名な「古事記」の一挿話を芥川龍之介は割愛して迫り来る危機に予兆としてのみ記述した。天孫族の素戔嗚尊は、土着の出雲族の娘櫛名田姫との結婚によりこの地方に生活の基盤を築くことに専念する。これ以前に武勇に長けた素戔嗚尊が、清楚で楚々とした櫛名田姫を出雲の簸の川の岩場から迫り来る大蛇の魔の手から救出する場面、「女は彼の近づくのも知らず、岩の上へ独り泣き伏してゐた。」（「素戔嗚尊」三十四）について、長野嘗一「芥川龍之介と古典」（「第十二章」）に、ローレライの伝説に拠るという卓抜な意見がある。これは、ハイネや独逸文学についての知識に拠るものではなくて、与謝野鉄幹「あゝわれコレツヂの奇才なく／バイロン、ハイネの熱なきも」（「人を戀ふる歌」）からのハイネにつての一般的知識を得た世代が、近藤朔風「なじかは知らねど・・・・・・」の名訳詩から思い描いた印象であろう。

> 高志の大蛇を退治した素戔嗚は、（中略）出雲の須賀へ八広殿を建てた。宮は千木が天雲に隠れる程大きな建築であつた。（「老いたる素戔嗚尊」一）

これらの記述は、全て「古事記」に依拠した箇所であって特に後半部分は最近になって考古学的に考証された歴史的事実である。「老いたる素戔嗚尊」は全体的に「古事記」に依拠した事実を記述するのみで作中に逸脱箇所はなくて典拠に沿っている。その分面白味に欠けるが、作者としてはそれだけ安心して創作集「春服」

に収録できたと言えるだろう。「素戔嗚尊」（「一」－「三十五」）には今日から見て芥川龍之介の生の告白が聞けて面白いが、作者自身は後年それを喜ばなかったのである。

日常生活の平穏と共に疾風怒濤の高天原の記憶も同時に薄れて来る。或る日彼は、往時の彼を彷彿させる高天原から来た三人の若者と逢い、天照大神に天叢雲劒（「草薙劒」）を託して高天原との事実上の決別を成す。

彼はそれから独り海辺へ行つて、彼等を乗せた舟の帆が、だんだん荒い波の向うに、遠くなつて行くのを見送つた。（「老いたる素戔嗚尊」一）

この一文は、芥川龍之介の脳裏に依拠した「古事記」の記載事項で高天原が、出雲から航路到達可能な地に、具体的に朝鮮にあるという認識があったということである。結婚生活で平穏な日常生活に浸る幸福感と同時に過去の学友との熾烈な学問、創作の世界が消えていったことの一抹の寂しさを作者が、実感していたことの証である。「素戔嗚尊」（「一」－「四十五」）は、従来問題視されることのなかった作品であるが、広い意味でこの作品は松本清張に影響を与えている。動乱の過去を抹殺して平穏に生きる男の人生に横切る過去の記憶というのは、清張文学の主要なテーマである。

12（「老いたる素戔嗚尊」二）

愛する櫛名田姫の死を契機にして、素戔嗚尊は息子の八島士奴美に国を譲り娘の須世理姫と一緒に絶海の孤島根堅洲国に移り住んで老後の生活を送る。「老いたる素戔嗚尊」（「一」－「十」）は、全体として典拠「古事記」の記載事項をなぞる方向で堅実な物語展開を見せるが、その分面白味に欠ける筋展開になっている。「老いたる素戔嗚尊」に仮託すべき何物も作者芥川龍之介の側になかったということであろう。「素戔嗚尊」（「一」－「三十五」）には至るところに、いや全編に素戔嗚尊に自己の心情を仮託した作者の生の声を聞くことが出来た。そして作品としての面白さもそこにあったと言えるが、「老いたる素戔嗚尊」には造型された作中人物は、訴えるべき何物も持っていなかった。「老いたる素戔嗚尊」（「一」－「十」）で特筆すべきは作中鋭く光る作者の美しい文章表現能力だけである。

宮のまはりにある椋の林は、何度となく芽を吹いて、何度となく又葉を落した。其度に彼は髯だらけの顔に、愈皺の数を加へ、須世理姫は始終微笑んだ瞳に、益涼しさを加へて行つた。（「老いたる素戔嗚尊」二）

老いたる素戔嗚尊が娘の須世理姫と共に移住する地は、根堅洲国である。これについては「黄泉国の別名。しかしそれでは話が合わない。作者はどこかの島のつもりで黄泉国とは区別して用いたのであろう。」（吉田精一篇「筑摩全集類従芥川龍之介全集」脚注）という説明の如くに歴史的考証を無視している。従って「やがて櫛名田姫の亡き骸は、生前彼女が用ひてゐた、玉や鏡や衣服と共に、須賀の宮から遠くない、小山の腹に埋められた。」（「老いたる素戔嗚尊」二）という記述も「古事記」の伝承世界を考古学的に考証した記述とは思われない。前掲吉田精一篇脚注「出雲の須賀」（「島根県大原郡海潮村大字諏訪」）と説明しているが、この近郊で最近考古学的な発掘があったのは偶然である。「老いたる素戔嗚尊」を書く上で芥川龍之介が、依拠した「古事記」の記載事項の考古学的考証を配慮した形跡はない。

13（「老いたる素戔嗚尊」三）

老いたる尊と娘須世理姫との父娘の静かな孤島での生活は、突然現れた一人の若者葦原醜男（「大国主神の別名。醜は勇猛の意。スサノオノミコトの実子とも六世の孫ともいう。出雲の主神となる。」吉田精一篇「筑摩全集類従芥川龍之介全集」脚注）の存在に因り破られる。素戔嗚尊とその娘須佐理姫とその恋人となる葦原醜男（「大国主神」）との関係の考古学的考証は、どうか。先に記述した「（素戔嗚尊が）遠い海の向うにある根堅洲国へ移り住んだ。」（「老いたる素戔嗚尊」二）という辻褄の合わない記述も、作者が依拠した「古事記」の記載に沿っているのである。「（大穴牟遅神に対して大屋毘古神が）須佐

能男命の座せる根堅州国に参ゐ向ふべし。必ず其の大神、議らむ」（「須佐之男命のいらっしゃる根之堅州国に参り向いなさい。きっとその大神がとりはからってくれるでしょう」）、須佐之男命が根之堅州国に行ったという記事が、これ以前にないということから本居宣長「古事記伝」に拠れば、脱漏を想定しているということである。「吉田精一篇脚注」もこの宣長説を踏襲している。

「老いたる素戔嗚尊」（三）で描かれている、突然根堅洲国に現れた若者葦原醜男と須世理姫との恋愛は、全て「古事記」記載事項を芥川龍之介が私流に書き直した場面である。以下、検証していくが「老いたる素戔嗚尊」（「一」－「十」）には独創箇所は存在せず、作者が何故に創造性に富んだ前半を捨てて後半を「春服」に収録したのか理解に苦しむ。

14（「老いたる素戔嗚尊」四－九）

老いたる素戔嗚尊は、愛する娘須世理姫を奪われることの不快に耐え切れずにこの男、葦原醜男に対して試練を与えるが、彼は恋人須世理姫の協力を得て窮地を脱する。試練の内容は全て依拠した「古事記」にある挿話で作者の独創はほとんど無い。素戔嗚尊が、葦原醜男に与える試練は、全部で四つである。これらは全て「古事記」記載事項である。第一の試練は、蜂の室に閉じ込められるも須佐理姫の領巾に拠り救われる。

須佐理姫は肩にかけた領巾を取つて、葦原醜男の手に渡しながら囁くやうにかう云つた。「蜂の室へ御はひりになつたら、これを三遍御振りなさいまし。さうすると蜂が刺しませんから。」（「老いたる素戔嗚尊」四）

（来し日の夜は、呉公と蜂との室に入れき、亦、呉公と蜂とのひれを授けて教ふること、先の如し。故、平らけく出でき。）

その星のやうな光物が、殆ど馬さへ呑みさうな、凄じい大蛇の眼に変つた。（中略）拾つて置いた領巾を取出して、三度ひらひらと振り廻して見た。・・・・・・（「老いたる素戔嗚尊」六）

（是に、其の妻須勢理毘売命、蛇のひれを以て其の夫に授けて云ひしく、「其の蛇咋はむとせば、此のひれを以て三たび挙りて打ち撥へ」といひき。故、教の如くせしかば、蛇、自ら静まりき。故、平らけく寝ねて出でき。）

第一の試練と第二の試練は、「老いたる素戔嗚尊」と「古事記」とでは、記載順序は逆であるが、記述の内容に異同がある訣ではない。芥川龍之介は、典拠なくして創作行為を成し得ぬ作家であることを再認識せざるを得ない。「毎日糞を嘗めるやうな思ひをしながら素戔嗚尊を書いてゐる」（「佐藤春夫宛書簡」大正九年四月四日）、「新聞へ糞の如き小説を書いてゐる」（「松岡譲宛書簡」大正九年四月十一日）、「スサノヲを二十回位まではなぐつたがこの頃は大に身を入れて書いてゐる」（「南部修太郎」大正九年五月十八日）、こうしてみると前半は書き飛ばして雑であるが、後半「老いたる素戔嗚尊」は身を入れて書いたことになる。つまり、芥川龍之介は典拠に寄りかかりながら書いた後半、とりわけ「老いたる素戔嗚尊」は前半の「素戔嗚尊」より優れているという自覚があったことになる。それ故に「老いたる素戔嗚尊」を「春服」に収録したのである。この辺についての認識は、彼の文学的才能の質、その限界を露呈していると思う。

素戔嗚尊が、葦原醜男に与えた第三、第四の試練は火責めとさらに頭髪の百足を取り除く行為である。いずれも「素戔嗚尊」を書くのに依拠した「古事記」に記載された挿話を使っている。

走つてゐる内にどうしたはずみか、急に足もとの土が崩れると、大きな穴の中へ落ちこんだのです。（中略）見ると私のまはりには、何百匹とも知れない野鼠が、土の色も見えない程ひしめき合つているのです・・・・・。」（「素戔嗚尊」九）

（亦、鳴鏑を大き野の中に射入れて、其の矢を採らしめき。故、其の野に入りし時に、即ち火を以て其の野を廻り焼きき。是に、出でむ所を知らずありし間に、鼠、来て云ひしく、「内はほらほら、外はすぶすぶ」）

すると側にゐた須世理姫が、何時の間に忍ばせて持つて来たか、一握りの椋の実と赤土とをそつと彼の手へ渡した。彼はそこで歯を鳴らして、その椋の実を嚙みつぶしながら、赤土も一しよに口へ含んで、さも百足をとつてゐるらしく、床の上へ吐き出し始めた。(「素戔嗚尊」十)

(呉公、多た在り。是に、其の妻、むくの木の実と赤き土とを取りて、其の夫に授けき。故、其の木の実を咋ひ破り赤き土を含み、唾き出ししかば、)

「古事記」の記載事項に拠れば、葦原醜男(大国主命)は、兄弟の八十神に何度となく殺され母親の刺国若比売によって蘇生させられて木の国(紀の国)、大屋毘古神に逃げてこの神の勧めで根堅洲国の須佐能男命の保護を求める。「須佐能男命の坐せる根堅州国に参ゐ向ふべし。必ず其の大神、議らむ」、これに拠れば葦原醜男は救援を求めて須佐能男命の住む根堅州国に赴いた訣で、彼に課せられた四つの試練は、その能力を試すための資格試験でもあった。「古事記」では、須世理毘売を連れて逃亡する大穴牟遅神(大国主神)を父親の須佐之男大神が、黄泉ひら坂まで追いかける。

黄泉ひら坂に追ひ至りて、遥かに望みて、呼びて大穴牟遅神に謂ひて曰ひしく、「(前文省略)其の我が女須世理毘売を適妻と爲て、・・・・・」(「古事記」大国主神)

根堅洲国については、「さうして彼自身は須世理姫と共に、遠い海の向うにある根堅洲国へ移り住んだ。」(「老いたる素戔嗚尊」二)というように「古事記」記載通り記述している。しかし、「老いたる素戔嗚尊」での根堅洲国が黄泉国でないことは、葦原醜男と須世理姫が手を取り合って逃亡するのを素戔嗚尊が見送るのが、「黄泉ひら坂」(「古事記」)ではなくて海岸だということからわかる。

15(「老いたる素戔嗚尊」十)

海は高い浪の向うに、日輪さへかすかに蒼ませてゐた。その又浪の重なつた中には、見覚えのある独木舟が一艘、沖へ沖へと出る所だつた。(「老いたる素戔嗚尊」十)

「容貌の醜い若者」(「素戔嗚尊」)として作品冒頭に登場した素戔嗚尊であったが、彼の娘須世理姫と結婚するのは葦原醜男(「葦原色許男命」)である。彼は、「甚麗しき神、来たり」(「たいへん立派な神が来ました」)と典拠「古事記」にあるように素戔嗚尊とは、異質の新しい世代の人間として形象化されている。その人間像は、「老いたる素戔嗚尊」にあっては四度の試練を受けながら全てを明るく受け流す積極的人物像として造型された。それゆえに四度の内三度の試練は、須世理姫の機転で回避している。さらに幸運により運命を打開した。三度目の試練の時は、受難を与えた素戔嗚尊の方が自分の与えた行為を後悔する設定である。「眠に就く事が出来なかつた。それは葦原醜男を殺した事が、何となく彼の心の底へ毒をさしたやうな気がするからであつた。」(「老いたる素戔嗚尊」八)

素戔嗚尊によって第一、第二の試練を与えられ須世理姫の機転で奇跡的に生還した葦原醜男は、二度同じ返答をする「ええ、御かげでよく眠られました。」(「素戔嗚尊」五、六)、この人物が素戔嗚尊の分身であることは、以下の引用文で明らかである。

何気なく鏡へ眼を落した。鏡は冴え渡つた面の上に、ありありと年若な顔を映した。が、それは彼の顔ではなく、彼が何度も殺さうとした、葦原醜男の顔であつた。(「素戔嗚尊」十)

こうした認識の基に彼、素戔嗚尊は自分の娘と共に絶海の孤島根堅洲国を立ち去る二人を祝福する。「おれはお前たちを祝ぐぞ!」(「素戔嗚尊」十)、この場面も典拠に同趣旨の記載がある「おれ、大国主神と為り」(「古事記」)。

芥川龍之介は、文学史上は新理知派と目され前の世代、白樺派の理想主義、人道主義を乗り越えるべき存在であったが、楽天的な生命感に満ちた白樺流のおおらかさが残っていたと考えられる。先の大東亜戦争の敗戦は、日本人が積み上げてきたこの種の理想主義に終焉を齎した。イデオロギーの蔓延は、人間社会の複雑な諸相を単純化させ、善と悪の原色の色彩により変形

させた。自らが属する秘密結社こそが神の恩寵であり、他は殲滅しなくてはならない悪の巣窟であるという認識を蔓延させた。自己の無能を死に至るまで疑うことのない狂信者の創造を許したこと、この種の人間の大量生産を齎したことが、大東亜戦争敗北の本当の意味である。司馬遼太郎「翔ぶが如く」には、故郷鹿児島に向かって敗走する薩摩軍にあって馬上意気軒昂、絶望的集団にあって単騎戦闘態勢を崩さない桐野利秋を描いた。明治十年においては愛すべき存在であったこの種の人間を敗戦後の日本社会はイデオロギーの汚染により大量生産したのである。

むすび

「素戔嗚尊」(「一」－「三十五」)は、作者芥川龍之介により事実上破棄された。前半部は、年少にして高架に上った彼に対する同時代文壇人の毀誉褒貶する標榜を掲げた作者の告白であり、後半部分は自らの遊郭での絶望的生活を綴った芥川龍之介の「仮面の告白」である。「老いたる素戔嗚尊」(「一」－「十」)は、「古事記」に依拠した創造的構築の少ない作品である。大正期芸術至上主義の立場にある芥川龍之介にとって「古事記」は、「神代小説(中略)續いて彦火々出見尊と日本武尊をも書いてみる心算です」(「薄田淳介宛書簡」大正九年三月二十七日)とあるように文学的素材の一つである。芥川龍之介より、六歳年上の大川周明は、コットン「新インド」で覚醒した精神で「古事記」の理解に及び国家主義者となったし、戦後忘れられた本居宣長「古事記伝」を対象に小林秀雄「本居宣長」は、その対象のオカルト思考に迫った。芥川龍之介「素戔嗚尊」が依拠した「古事記」は、日本精神に無縁な文学的素材に過ぎなかった。

Ⅲ「往生絵巻」

はしがき

「往生絵巻」(「国粋」大正十年四月)は、「今昔物語」(「巻十九第十四」)を典拠とする。芥川龍之介が何故即身成仏の譚に興味を持ったかについては一つの仮説がある。「源平盛衰記」から示唆されて自身の基督教回心の心情を綴った北村透谷「心機妙変を論ず」(「白表女学雑誌」明治二十五年九月二十四日)、典拠「源平盛衰記」と透谷の実作双方から示唆されて「袈裟と盛遠」(「中央公論」大正七年四月)を書いた延長戦上の創作行為である。さらに盟友、菊池寛「恩讐の彼方に」(「中央公論」大正八年一月)から示唆を受けた可能性大である。作品主題は、悪行の限りを尽くした男が、一瞬のためらいを見せる事無く仏道に精進し阿弥陀仏の声を連呼しながら体全体で救いを求めて荒野をさ迷い成仏する話である。典拠「今昔物語」(「巻十九第十四」)を離れて、譚そのものは物珍しいものではなくてユーゴー「レ・ミゼラブル」の主人公ジャン・ヴァルジャンの波瀾の人生もそれである。さらに「西方の人」には、芥川龍之介が興味を持続させた二つの挿話の記述がある。一つは「どこへ行く？」(「西方の人」二十七)とイエスに詰られたペテロであり、もう一人は「サウロよ、サウロよ、何の為にわたしを苦しめるのか？棘のある鞭を蹴ることは決して手易いものではない。」(「西方の人」三十五)とイエスに詰問されたパウロの例である。中国視察旅行を直前に控えた怱々の間に仕上げた事情で作者による作品概説が残された。挿絵を担当した小穴隆一宛、以下の解説で大至急二枚の絵を創作して「往生絵巻」掲載の「国粋」に転送されたいという但し書きが付いている。

武士あり。郎等四五人と鹿猟に出でし帰途或寺の説法をきき、突然剃髪す。郎等共驚き悲めどせんなし。水干袴の代りに袈裟法衣を着、金鼓を胸にかけ、「阿彌陀佛よや、おおいおおい、」と叫びながら、西の方へ歩き行く。阿彌陀佛は衆生渇仰の聲に答へ給ふべし聞きし故なり。西に大海あり。海邊に二股の枯木あり。その上に登り、海を望んで「阿彌陀佛よや、おおい、おおい」と言ふ。七日にして餓ゑて死す。そのほとりに住む僧一人、尋ね行きて見れば、枯木梢上の屍骸、口中より一朶の蓮華を生ぜしむを見る。往生せしを知る。随喜極りなし。(「小穴隆一宛書簡」大

正十年二月）

この作品について最初に言及したのは、芥川龍之介の言に拠れば正宗白鳥である。「それから泉のほとりの中にある往生畫巻の御批評を拝見しました（中略）最後に国粋などに出た小品まで讀んで頂いたことを有難く存じます往生繪巻杯は雑誌に載つた時以来一度も云々されたことはありません」（「正宗白鳥宛書簡」大正十三年二月十二日）、これは芥川龍之介が正宗白鳥宛に投函した唯一の書簡で「一塊の土」（「新潮」）を賞賛した正宗白鳥の記事（「郷里にて」）「私の読んだ新年の数十篇の創作中では、これが最大の傑作である。」（「文藝春秋」大正十三年二月）に対する感謝の書簡の一節である。芥川龍之介が、正宗白鳥宛書簡で言う「泉のほとりの中にある往生畫巻の御批評」を今のわたしは、直接目にする事は出来ないが、その具体的内容は後年正宗白鳥自身が繰り返して言及している。「・・・・・・五位の入道の屍骸の口に白蓮華が咲いてゐたといふのは、小説の結末を面白くするための思付であつて、本当の人生では、阿弥陀仏を追掛けた信仰の人五位の入道の死骸は、悪臭紛々として鴉の餌食になつてゐたのではあるまいか。古伝記の記者はかく信じてかく書きしるしてゐるのかも知らないが、」（「中央公論」昭和二年十月）、これは芥川龍之介没後の感想であるが、生前の正宗白鳥の「往生絵巻」についての感想も同趣旨であったことが、本人の言から判明する。この正宗白鳥の言を受けて、芥川龍之介が生前唯一投函した白鳥宛前記書簡には、「往生絵巻」典拠である「今昔物語」（「巻十九第十四」）の記載事項についての芥川龍之介の感想が記述されている。それに拠れば典拠にある二つの奇蹟「阿弥陀仏をや、をいをい。何こに御ます」（「阿弥陀仏よ、おうい、おうい」）という呼びかけに応じて「此に有」（「ここにおる」）については、こうした現象はあり得ないと否定している。しかし、同じ奇蹟でも「見れば、口より微妙く鮮なる蓮花一葉生たり。」（「見れば、口からえもいわれぬ色あざやかな美しい蓮の花が一葉生えていた。」）については、これを肯定しているのである。

「往生絵巻」の結末について正宗白鳥は「入道の死骸は、悪臭紛々として」と評したが、これについて芥川龍之介は、異議を唱えたのである。この作者の異議に賛同して見せたのは、宮本顯治である。

この「往生絵巻」はユーモラスな形式の下に、笑ひ切れない求道者の姿を書いてゐる。正宗白鳥氏は、この作品の結末のまつ白な蓮華の咲く非現実的な描写を捉へて、芥川氏がリアルに徹することの出来なかつた人だといふことの例証としてゐる。（中略）けれど、こうした偏狭な自然主義的批判は、永久に、作品の本質を理解し得るものではない。作者は「五位の入道」を愛してゐる。（「『敗北』の文学」昭和四年八月）

作者は、「往生絵巻」典拠に記録された奇蹟事項でも「此に有」という海中の声は、理性で否定して「口より（中略）蓮花一葉生たり。」という妙蓮華の口より生えた奇蹟は、これを是認しているのである。「口裏の白蓮華は今でも後代の人の目には見えはしないかと思つてゐます」（「正宗白鳥宛書簡」大正十三年二月十二日）、この芥川龍之介の奇蹟に対する見識は後年どのような実態であったか。「お前の信仰はお前を癒した。」（「西方の人」十六）というのが奇蹟についての見解であり、「ラザロの死から生き返つたのはかう云ふ彼の感傷主義の為である。」（「西方の人」二十三）というのが復活についての芥川龍之介の見解で、作品中では、奇蹟と復活とを福音書をなぞる方向で記述していて異議を唱えてはいない。「西方の人」を離れた個人としての芥川龍之介は到底、奇蹟と復活のオカルト事項に信を置いてはいなかったが「ラザロの復活」については、主としてイエス自身の神の国に対する信念から帰納的に導き出して事実として認定しているように見える。その根底にあるのは「ラザロの復活」の記載事項の直前にあるイエスの言動「我を信ずる者は死ぬとも生きん」であり、このイエスの言辞の一環として「ラザロの復活」を芥川龍之介が把握しているからではないかと思う。

「往生絵巻」の結末については、吉田精一は

芥川龍之介の立場に立ってこれを是認する発言をしている。「こういう超自然の精神力に対する信念が彼にはあった。（中略）かゝる神仏の実在を信じた、この求道者に荘厳なものを感じているのである。」（「芥川龍之介」二十一）

本論

典拠「今昔物語」（「巻十九第十四」）は、一人の放蕩無頼の犯罪者が法話によって回心して極楽浄土に成仏する経過を順序立てて記録している。この典拠を芥川龍之介は、全編戯曲形式で書き改めて様相を一変させた。即身成仏を遂げる五位の入道（「往生絵巻」）のそれに至る経過を三十名を超える登場人物に状況を語らせるという形式を踏まえているのである。典拠「今昔物語」（「巻十九第十四」）は、全体が八の章立てから出来ている。

①讃岐の国の住人で法話を嫌い、犯罪行為を繰り返した男が皆に嫌われて生きていた。

鋳物師おや、あれは多度の五位殿ぢやないか？（「往生絵巻」）

今昔、讃岐国、多度の郡（中略）源大夫と云ふ者有けり。（「今昔物語」）

（「今は昔、讃岐国多度郡に、源大夫と称せられている者がおった。」）

②男は、ある日仲間の郎等と共に法話の席に列席するが、法話の席に出席の人々は恐れ慄いて彼に席を譲った。

若き尼　ほんたうに恐しい人でございました。山狩や川狩をするばかりか、乞食なぞも遠矢にかけましたつけ。（「往生絵巻」）

五位並居たる人を押分て入れば、風に靡く草の様に靡たる中を分け行て、（「今昔物語」）

（「源大夫が居並ぶ聴衆を押し分けてはいって行くと、風になびく草のように人垣がなびく。」）

③法話の趣旨は、阿弥陀仏を唱えれば誰でも極楽浄土に迎えられる。在家より出家のほうがよりその可能性が大であるという事である。

五位の入道　いや、別段仔細なぞはござらぬ。唯一昨日狩の帰りに、或講師の説法を聴聞したと御思ひなされい。その講師の申されるのを聞けば、どのやうな破戒の罪人でも、阿弥陀仏に知遇し奉れば、浄土に往かれると申す事ぢや。身共はその時体中の血が、一度に燃え立つたかと思ふ程、急に阿弥陀仏が恋しうなつた。（「往生絵巻」）

一度、『阿弥陀仏』と申しつれば、必ず其の人を迎て、（中略）「今日の講師の様に、頭を剃たる者は皆仏の御弟子也。男も女も御弟子なれども、尚頭を剃れば増る事也」（「今昔物語」）

（「一度でも『阿弥陀仏』と唱えれば、仏様は必ずその人をお迎えくださいます。（中略）『今日のこの講師のように頭を剃った者はみな仏の御弟子です。すべて俗人の男も女も御弟子ではありますが、やはり頭を剃ればいっそうまさるのです』」）

水銀を商ふ旅人　何でも奥方や御子供衆は、泣いてばかり御出でだとか云ふ事でした。（「往生絵巻」）

家に返、妻子眷属などに云ひ合せて、万を拈て剃り給うべき（「今昔物語」）

（「いったんお家に帰って妻子や従者共にご相談になり、万事を処置なさってからお剃りになるがよろしかろうと存じます」）

④一瞬のためらいを見せる事なく出家を決心して、それを実行する。法話をしている僧侶に頼んで戒を受ける。周囲は突然の回心に驚き、呆れる。

油を商ふ主　私はきつと天狗か何かが、憑いてゐると思ふのだがね。（「往生絵巻」）

直き心にては此る事不有じ。物の詫き給ひにけるをこそ有けれ（「今昔物語」）

（「とても正気の沙汰ではこんなことはなさりますまい。憑き物でもなされたにちがいありません」）

⑤それからは、阿弥陀仏の名を呼びながら野を越え山を越え歩き続ける。

五位の入道　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。（「往生絵巻」）

「阿弥陀仏をや、をいをい」（「今昔物語」）

（「阿弥陀仏よ、おうい、おうい」）

⑥或寺に行き着き住持から干飯をもらい、七日の後に後を追う約束をして寺を出る。

老いたる法師　如何にも。御坊は何処へ御行き

なさる？（「往生絵巻」）
今七日有て、我が有らむ所を必尋て来れ。（「今昔物語」）
（「これから七日たって私の居るところを必ず尋ねて来て下さい。」）
⑦海を越えてさらに西に行こうと思っていたが、阿弥陀仏が答えてくれたので二股の木にまたがり呼び続けた。海からは「ここにいる」という返事があった。
幸ひ此処に松の枯木が、二股に枝を伸ばしてゐる。まづこの梢に登るとしようか。－阿弥陀仏よや。おおい。おおい。再び浪の音　どぶりどぶん。（「往生絵巻」）
「阿弥陀仏をや、をいをい。何こに御ます」（中略）「此に有」（「今昔物語」）
（「阿弥陀仏よ、おうい、おうい。いずこにおわしますか」（中略）「ここにおる」）
⑧住持が来て見ると出家した男は、すでに二股の木の上で死んでいた。口からは極楽往生の兆候である蓮華が生じていた。
この法師の死骸の口には、まつ白な蓮華が開いてゐるぞ。（「往生絵巻」）
見れば、口より微妙く鮮なる蓮華一葉生たり。（「今昔物語」）
（「見れば、口からえもいわれぬ色あざやかな美しい蓮の花が一葉生えていた。」）

「往生絵巻」と典拠「今昔物語」（「巻十九第十四」）とを引き比べた場合すぐに気付くのは、典拠の語りの場面すべてを三十名を超える登場人物の発言に置き換えている事である。源大夫（「今昔物語」）の行為は、五位の入道（「往生絵巻」）では周辺の人物の目撃証言で再現されていて、五位の入道は全篇十六回の発言の内、九回は「阿弥陀仏よや。おおい。おおい。」という同趣旨の発言を繰り返すのみである。即身成仏を目指して荒野を驀進する一人の出家の最期を客観的に浮かび上がらせる方法として、多数の部外者の客観的目撃で浮かび上がらせる手法は、優れている。何よりも抜き出ているのは、悪行の限りを尽くして突然回心して、仏を求めて荒野を彷徨う「今昔物語」（「巻十九第十四」）の典拠に着眼したのが、芥川龍之介の手柄であると言える。

作者がこの典拠に興味を持ったのは、この譚の持つ神秘的な側面についてである。「此に有」という返答、それから「蓮華一葉生たり」という神秘的現象である。前者は否定され、後者は「往生絵巻」の最後で印象深く書き記された。前者については、「今昔物語」（「小学館日本古典文学全集」頭注は、「海の中に微妙の御音有て」（「海中の声は、現代的解釈を加えれば、周囲の山に反響した一種の山彦とも考えられよう。」）と説明している。芥川龍之介は前掲、正宗白鳥宛書簡（「大正十三年二月十二日」）で前者のオカルト現象をヒステリと認識しているが、後者は可視可能の神秘的現象として把握している。わたしから公平に判断すると芥川龍之介の二つのオカルト現象に対する認識の違いは、公平さを欠くように思える。

「往生絵巻」で作者が、意を注いで書き残したのは作品題名にあるように「往生」の状況である。前者の神秘現象は、（老いたる法師）「三度波の音　どぶんどぶん。」と写実的に記述していて後者は、（老いたる法師）「この法師の死骸の口には、まつ白な蓮華が開いてゐるぞ。」と部外者がその神秘的現象を直接目撃するオカルト的記述を取っている。「口裏の白蓮華は今でも後代の人の目には見えはしないかと思つてゐます」（「正宗白鳥宛書簡」大正十三年二月十二日）という後年の芥川龍之介書簡が、これを裏付けている。

五位の入道（「往生絵巻」）では、何故に浮世を捨て出家したかを聞かれて、回想の思い出として、過去の記憶の断片として語るのみである。（五位の入道）「どのやうな破戒の罪人でも、阿弥陀仏に知遇し奉れば、浄土に往かれると申す事ぢや。」というのが唯一の動機である。しかし、典拠「今昔物語」（「巻十九第十四」）で譚の中心をなすのは、回心の瞬間の記述である。典拠には、極悪無道の五位が、偶々立ち寄った法話の席で出家するに至る法話の講師との問答を四度に亙って生々しく伝えている。
①「其の仏は人を哀れび給にては、我をもにくみ不給じなむ」（「その仏は人を哀れみなさると

いうことなら、このおれをもお憎みにはならんであろうな」）
②「然らば我れ其の仏の名を呼び奉らむに、答へ給ひなむや」（「ならば、おれがその仏の名をお呼びしたらお答えになろうか」）
③「其の仏は何なる人を吉とは宣ふぞ」（「では、その仏はどういう人がお好きだとおっしゃるのか」
④「何なるを弟子とは云ふぞ」（「どのような者を弟子というのか」）
⑤「然は、我が此の頭剃れ」（「ならば、おれのこの頭を剃れ」）

典拠「今昔物語」（「巻十九第十四」）の源大夫（「五位」）は、ためらう事のない行為の人で善悪の色彩の鮮明な人物である。こうした、疑う事を知らない説話の人物の再造型は、近代人である芥川龍之介にとっては、興味深いものだった筈であるが素材としては捨てている。典拠の持つ人間の深層のドラマには興味が向ず、作品末尾のオカルト事象のみに関心があったのであろう。北村透谷「心機妙変を論ず」で追及された芥川龍之介「砕けたる霊魂」（「断片」唾）に類する課題にこの時期の作者は、無関心であったと言える。典拠に対する関心が、「椒図志異」と同じ神秘的事象についての関心のみだったからではないか。

典拠に愚直で直情径行と記録された五位は、典拠では「阿弥陀仏をや、をいをい。何こに御ます」という呼びかけに「此に有」という海からの声を聞き入道（「五位」）は、住持と共に欣喜雀躍する。二人の出家の目撃談を芥川龍之介は、前掲正宗白鳥宛書簡で「ヒステリ」であるとう理解を示した。芥川龍之介の素材についての認識は、ばらつきがある。

典拠「今昔物語」（「巻十九第十四」）で描かれているのは、悪行の限りを尽くした源大夫の一瞬の回心の劇的なそれである。「往生絵巻」は行為の跡に思いを残す事無く、躊躇う事無く出家して仏を求めて彷徨する男の精神のドラマを追う作品にはならなかった。基督教に対する回心を経験した北村透谷は、自身の精神史の劇的回転の経験を「心機妙変を論ず」に残した。悪逆無道の人物が、瞬時に頭を丸めて阿弥陀仏の声を求めて走り始める精神の軌跡に芥川龍之介の関心が向かなかったのは、彼自身が書斎派知識人で自身、北村透谷の体験した精神の一瞬の劇的回転を経験する事が無かったからである。最晩年の作品は、精神のコペルニクス的転回を迫る基督者、室賀文武と芥川龍之介の会話を残している。「（前文省略）唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行つた奇蹟を信じさへすれば・・・・・・」「悪魔を信じることは出来ますがね。・・・・・・」（「歯車」五）、典拠「今昔物語」（「巻十九第十四」）の譚の中で重要な場面である人物の回心の経過に作者の関心が向かず、さらに「此に有」という超自然の現象にも関心が向かなかった。「口裏の白蓮華は今でも後代の人の目には見えはしないか」（「前掲、正宗白鳥宛書簡」）というのが、芥川龍之介の率直な感想である。こうした作者の認識が典拠にある二つの超自然現象「阿弥陀仏をや、をいをい。何こに御ます」「此に有」と「蓮花一葉生たり」の内、前者については「三度波の音どぶんどぶん」と写実的に記述し、後者については「蓮華が開いてゐる」と超自然現象のままに記載した理由である。

むすび

「天台や真言の護摩の煙に興味を感じてゐると云ふことではない。（中略）佛菩薩を始め天狗などの超自然的存在を如実に感じてゐたか」（「今昔物語鑑賞」昭和二年四月）、後年作者自ら述べる如くに「今昔物語」についての興味は、神秘的現象に対する近代人として知的好奇心から発せられたものである。作者の主体を変更されるほどの契機になり得る記事を目撃しても、超自然の怪異、神秘現象に対する知的関心の域を出る事のない認識では、自らの精神史を回転させるコペルニクス的転回を期待する事は所詮無理である。

第一高等学校の同級生であった倉田百三、佐野文夫の二人は放蕩三昧の末に学業を中途放棄するも前者は、親鸞「歎異抄」熟読の末「出家とその弟子」で復活、後者は創設期の日本共産

党幹部として再登場した。いずれも自己の精神史においてコペルニクス的転回を成した人物である。最晩年「斯くの如く左顧右眄(さこうべん)してゐる君」(「饒舌録」昭和二年二月一十二月)と谷崎潤一郎に批判された芥川龍之介は、自己の周辺にいた精神史の変革を成し遂げて猛進する人々から圧迫を感じたはずである。「往生絵巻」は、その典拠の扱い如何では認識者芥川龍之介に精神的変革を迫る要素があった。奇蹟と復活の神秘現象に対する全面的帰依により、キリスト者としての道を歩む契機をはらんでいたが、「往生絵巻」は作品成果としては、神秘現象を記述した一作品に止まり、作者の主体に変革を迫るものではなかった。